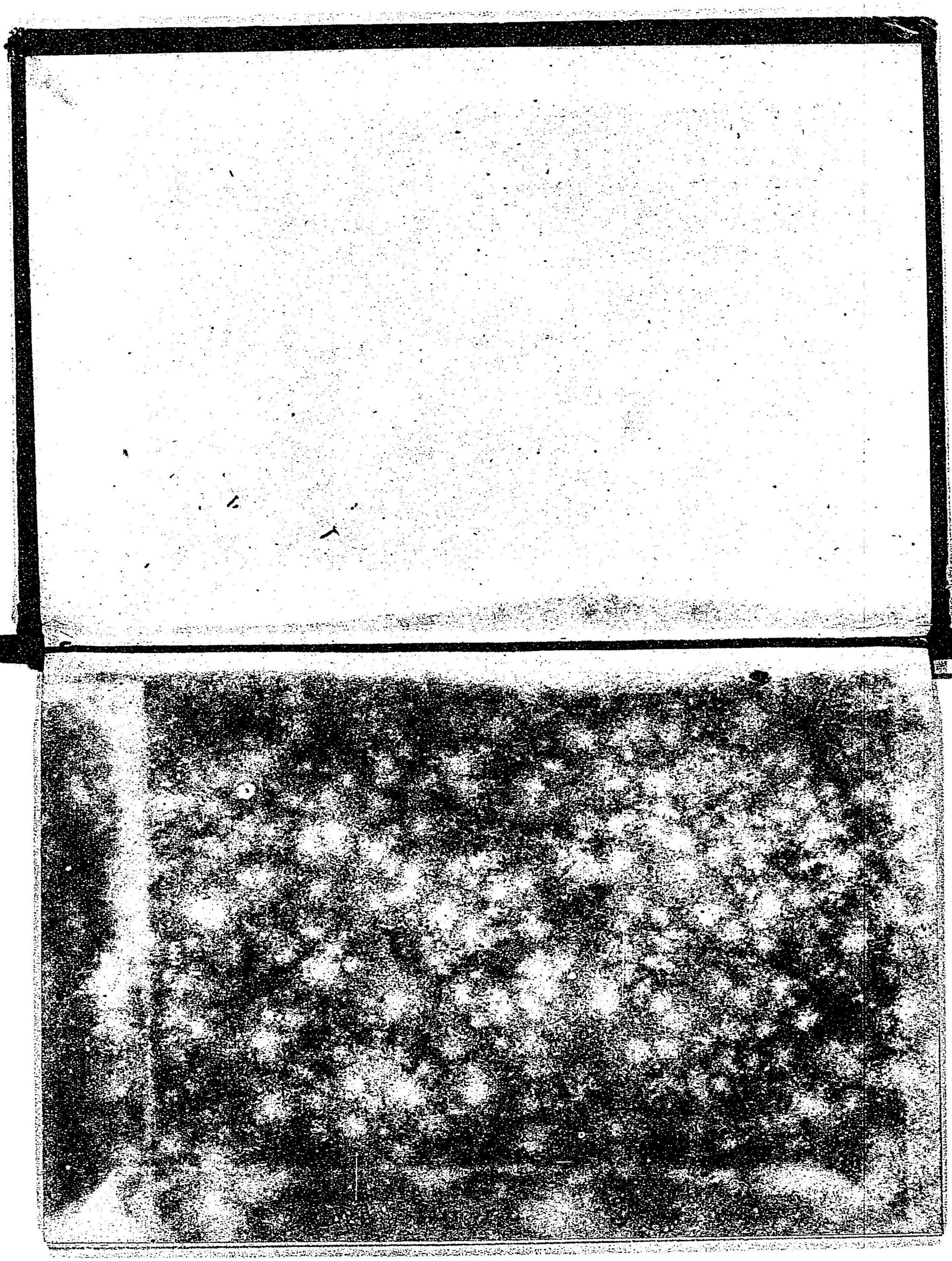
4759
特10
390



寄・ビ No.13846

13

神代の光越

序

詞

天磐船に乗りて飛び翔ける事は、神代の昔にありけむ。今の世に至りては、いと稀なるべし。されど、心ある人の筆とり留めずば、いかでか其の名を後の世に伝へむ。

舟の部

一、舟

舟の字は、木を刻み、水に浮かべて、人を乗せ、物を載せて、川海を渡るものなり。

一、船

船の字は、舟に沿ひて、舟の行くが如く、速やかなるものなり。

一、艇

艇の字は、舟の小さきものにて、一人乗りなどの軽きものなり。

一、艦

艦の字は、舟の上に甲板を張りて、兵を載せ、戦ふ舟なり。

一、艀

艀の字は、大船に荷を積み、岸に寄せて、人を乗せ、荷を運ぶ舟なり。

一、筏

筏の字は、木を組みて、水に浮かべ、人を乗せ、物を載せて、川を渡るものなり。

一、渡舟

渡舟の字は、両岸の間を往来して、人を乗せ渡す舟なり。

一、猪牙舟

猪牙舟の字は、細長くして、速く走る舟なり。

一、屋形船

屋形船の字は、舟の上に屋形を設けて、人を乗せ、遊ぶ舟なり。

一、荷足舟

荷足舟の字は、荷を積みて、川を下る舟なり。

一、伝馬舟

伝馬舟の字は、大船に付き添ひて、人を乗せ、荷を運ぶ舟なり。

一、釣舟

釣舟の字は、魚を釣る舟なり。

一、漁舟

漁舟の字は、網を引きて、魚を取る舟なり。

一、小舟

小舟の字は、小さき舟なり。

一、大船

大船の字は、大きなる舟なり。

雪の部

一、雪

雪の字は、空より降る白き物なり。

一、粉雪

粉雪の字は、細かなる雪なり。

一、牡丹雪

牡丹雪の字は、大きなる雪なり。

一、吹雪

吹雪の字は、風に吹かれて、雪の飛ぶなり。

一、雪崩

雪崩の字は、山の雪の、崩れ落つるなり。

一、雪明り

雪明りの字は、雪の光にて、夜の明るきなり。

一、雪国

雪国の字は、雪の多く降る国なり。

一、雪見

雪見の字は、雪を見て、楽しむなり。

一、雪合戦

雪合戦の字は、雪を丸めて、打ち合ふなり。

一、雪だるま

雪だるまの字は、雪を丸めて、人の形に作るなり。

一、雪下ろし

雪下ろしの字は、屋根の雪を、下ろすなり。

一、雪囲ひ

雪囲ひの字は、雪を防ぐ為に、囲ふなり。

一、雪解け

雪解けの字は、雪の溶けて、水となるなり。

一、雪道

雪道の字は、雪の積もりたる、道なり。

一、雪靴

雪靴の字は、雪の上を、歩く為の、靴なり。

一、雪眼鏡

雪眼鏡の字は、雪の光を、防ぐ為の、眼鏡なり。

一、雪女

雪女の字は、雪の精と、伝へらるる、女なり。

一、雪達磨

雪達磨の字は、雪を丸めて、作りたる、達磨なり。

一、雪洞

雪洞の字は、雪を積みて、作りたる、洞なり。

一、雪隠

雪隠の字は、雪の降る、隠れ家なり。

一、雪駄

雪駄の字は、雪の上を、歩く為の、駄なり。

一、雪見酒

雪見酒の字は、雪を見ながら、飲む酒なり。

一、雪見舟

雪見舟の字は、雪を見る為に、乗る舟なり。

一、雪見船

雪見船の字は、雪を見る為に、乗る船なり。

一、雪見車

雪見車の字は、雪を見る為に、乗る車なり。

一、雪見駕籠

雪見駕籠の字は、雪を見る為に、乗る駕籠なり。

一、雪見橇

雪見橇の字は、雪を見る為に、乗る橇なり。

一、雪見馬

雪見馬の字は、雪を見る為に、乗る馬なり。

一、雪見牛

雪見牛の字は、雪を見る為に、乗る牛なり。

一、雪見犬

雪見犬の字は、雪を見る為に、乗る犬なり。

一、雪見猫

雪見猫の字は、雪を見る為に、乗る猫なり。

一、雪見鼠

雪見鼠の字は、雪を見る為に、乗る鼠なり。

一、雪見兎

雪見兎の字は、雪を見る為に、乗る兎なり。

一、雪見狐

雪見狐の字は、雪を見る為に、乗る狐なり。

一、雪見狸

雪見狸の字は、雪を見る為に、乗る狸なり。

一、雪見猿

雪見猿の字は、雪を見る為に、乗る猿なり。

一、雪見熊

雪見熊の字は、雪を見る為に、乗る熊なり。

一、雪見虎

雪見虎の字は、雪を見る為に、乗る虎なり。

一、雪見獅子

雪見獅子の字は、雪を見る為に、乗る獅子なり。

一、雪見象

雪見象の字は、雪を見る為に、乗る象なり。

一、雪見麒麟

雪見麒麟の字は、雪を見る為に、乗る麒麟なり。

一、雪見鳳凰

雪見鳳凰の字は、雪を見る為に、乗る鳳凰なり。

一、雪見龍

雪見龍の字は、雪を見る為に、乗る龍なり。

一、雪見亀

雪見亀の字は、雪を見る為に、乗る亀なり。

一、雪見蛇

雪見蛇の字は、雪を見る為に、乗る蛇なり。

一、雪見蛙

雪見蛙の字は、雪を見る為に、乗る蛙なり。

一、雪見蛞蝓

雪見蛞蝓の字は、雪を見る為に、乗る蛞蝓なり。

一、雪見蚯蚓

雪見蚯蚓の字は、雪を見る為に、乗る蚯蚓なり。

一、雪見蜘蛛

雪見蜘蛛の字は、雪を見る為に、乗る蜘蛛なり。

一、雪見蜈蚣

雪見蜈蚣の字は、雪を見る為に、乗る蜈蚣なり。

一、雪見蠍

雪見蠍の字は、雪を見る為に、乗る蠍なり。

一、雪見蝦蟇

雪見蝦蟇の字は、雪を見る為に、乗る蝦蟇なり。

一、雪見蟾蜍

雪見蟾蜍の字は、雪を見る為に、乗る蟾蜍なり。

一、雪見蝙蝠

雪見蝙蝠の字は、雪を見る為に、乗る蝙蝠なり。

一、雪見鼯鼠

雪見鼯鼠の字は、雪を見る為に、乗る鼯鼠なり。

一、雪見鼬

雪見鼬の字は、雪を見る為に、乗る鼬なり。

一、雪見貂

雪見貂の字は、雪を見る為に、乗る貂なり。

一、雪見鼠

雪見鼠の字は、雪を見る為に、乗る鼠なり。

一、雪見鼠

雪見鼠の字は、雪を見る為に、乗る鼠なり。

三五

見ぐるみ
見物 一まけて
見てくれ 定めし
こちくこが
有りさうでネ

何某娘 何子

志士何ごし氏像

作出来ばえ

おどかしくちぶり口画

特10
390

目錄

○洋食客物語
○滑稽百漫辨
○敵討あこの掛金
○滑稽金次第
○當歲法螺福引
○人情見立三景
○戀の仲秋
○軒の五月雨
○春景梅柳

滑稽笑說 乘合船

◎洋食客物語

東都鶯亭金升戲述

○懷中がガランデンの貧書生

二階造りの塗家寫眞店數と見れど寫眞店にも有らず一枚の看板に西洋料理と記し傍に上等中等の價附の頗る厥あるは是ぞ洋食店中の春木座なる今流行ッ子の某亭ふて滋養と言ふは附けたりにて下宿屋の精進に厭りし口を肉食に濕さんとする書生あれば出商ひの晝飯と驅り込む手代あり濱車より下りし田舍紳士人力車を待せる旦那まで雅俗と醵集と西洋とを練り堅めたる牛酪には似ずで燒鹽程に積めかれる客日毎〳〵の繁昌に金巾のテーブル掛も早晩ソップの色に染り錫の匕も食パンの形に潰れ花瓶の花根を殘して枯れ圍扇へ掛る竹のみ有り入口の草履は女誰の島の磯邊とや言ふ可く歌つめし古き毛織へ立田の川の初冬の色なるへん午砲の響と共に這入り來るハプックを抱へし二人連年頃は何れも十八九張飛の怒つと書を見るやうな散髮へ帽子を横ッちよに冠りステッキはお定まり眼鏡を外して倚子へ倒れる樣にドシント腰をかけ女中の持て來た書付

へ鉛筆にて印をつけながら「野崎君ハ何仮ずる「サレ見せうヴィ〳〵ビフテキにせう「コウ〳〵ビフテロウスだ玄「ハイ〳〵畏りました銘仁八ハ肉刺でテーブルを突ながら「昨日山田へ出なかつた子「左樣サ時に校長が今度の所置も余りぢやア無へか「彼ぢやア誰でも不滿足に違ひなひて子夫に頼ひといこたら實にひどいものを喰せるヅ豆腐や干物でもおさまらん「ァア堪へて置け少しのうちだソラ來たヅ「君此ソップは余り宜ゝ無いではないか「宜いソップなら此樣に鷄卵なぞを踏しハせんワ仕方が無い其バタを取て呉れ玉へ是ハいかん「此パンもボロ〳〵ーて居るワ「此ビフテッキはなか〳〵宜いぜ「肉ハ何樣のでも甘いものだナ「君此頃賣て居る馬肉を喰ふたか「イヽヤ馬肉ハ喰んが犬肉なら喰ふた「犬肉ァム犬か「然り此間の事で有たが彼田へナア君知て居るか「知とる〳〵「行たゥ酒を飲で君つた其うち下田がいゝ肴を遣うと言て皮包ミを持て來たから大勢て直煮て喰ふて仕舞たがナ後に聞けば犬じやと言ふので流石の僕も一驚を吃した哩「ハァヽヽひどいと言へば君聞き玉へ「夫ァいゝが最う仕舞だあげて喰ふとハふ男だ「ハヽヽヽ

ふうぜヲィ〳〵「珈琲を早く持來い〳〵「君其あとハ「外の事じャア無いが土谷はひどい奴だぜ此間ナア彼奴の留守に僕は一寸袴を借て出をうとしやァがつた「夫かゥ何うした「返して遣たから直濟だが返さぬと言たのじやァ無し只借用て出て二三日泊つた斗りで夫を持出すとは分らぬぢやァ無かナア君「分らぬと言へば樽井は今度の試驗に落第し居つたそうで「不平に吐露して居つた「夫ア其筈だ不公平お仕方だもの「不公平とは「君聞てくれ玉へ何だつて前の連中と今度のとハ第一問題からして違ふじやァ無いか段々難く成るはかりだ夫では君前の者に對して不公平では有るまいか左樣だや無か君「甲生はパンの喰ひ殘りを噛り乍ら「違ひ無しだ大ヒヤだ「だらうナア君「宜ゝ〳〵サア最う行可し「珈琲を呑んのかゥヽ「左樣ざつた「コー會計〳〵「女「ハイ〳〵ト會計書を持てくる「此處に有る「イヤ今日は僕が出さうナヨ金何十錢ト口のうちで讀み「よし〳〵君三錢出ーてくれ「三錢で宜いか「宜ー〳〵女ハ下を向て「おたちでスヨ有難う「ヤ失敬「失敬ッ

○ビフテキをなぶる半可通

鼠色の帽子と金時計ハ眼につけど官員然たる風にも有ず下着にハ派出お浴衣を重着何處やら氣取て居る体裁は藝人かとも見えたれど是い然る可き家の旦那株ふうしくお供ハ幫間ふして幫間にも有ぬ道八とハふ男「旦那まづれ入りあふれませう　旦「食物店なふハつも先陣を遣る癖に今日ハ大分お初會主義だヲ　道「恐れ入りやした併し膳に向へば笑を先途と喰て御覽に入升種仕掛と御坐いませんハ代は喰てのれ戻り〳〵　旦「袴を言てるゼト這入る階子をトン〳〵　女「入つしやい　道「是は何うだ姉さんばかりの一つ家で彼方の隅にハ匙が有り此方の隅には椅子が有りッ　旦「ナント默止ねへのハヽヽ　女「何にいたしませう　旦「中にせう　女「ハイ〳〵　道「其奴は中々鼠のカッレッが有るまいか旦「狐でも有るめへし狸なふ此處に居る　道「是はハかな事　旦「ア、否な振をする男だ女ソップを持て來る　旦「日本酒を持て來て貰ひたい「女ハ燗をつけ升の　道「ハテ野暮な女だヲ道八の女房にも似合ぬ　女「ホヽヽヽ　道「女房にするなら洋食の牛店の女中ふ限るといふ　旦「庭で野郎は鷄卵屋か「道ソウラそろ〳〵と大尾が出て來たヲ南無大尾返照五合ッ酒を早く〳〵　通客はパンへ牛酪を塗りつけ乍ら「此頃ふ何も珍器の堀り出

し話しを聴問しねへの道「イヤ最う旦那のお耳へ入れる様な話しい有りません何うも諸事お行届きの抜目と否味は無いと言ふのは旦那の事でステ先お茶事は旦「よしサ〻油をかけるのハ虫の毒だ道「油をかけと仕ませんが牛の油をつけて一つパンをして喰ヲ夫からツップをしよこ嘗ると旦「一々断るには及ばねへス道「ハテ底が正直者の癖サ、ヲットOOOO来たゾ何だ西洋の玉小焼ソラそろ〳〵と精分をつける奴サ旦「静にしねへか何だ可怪しな手をして夫でハ洋刀の持方が違ふ「ヘエ右に持んでスカハテ斯う肉刺と洋刀を持さところハ荒神様のお手を二本貰つて来たと言ふ掟りだ旦「宜く附曾るヲ「川柳宗匠の投票も極りましたか旦「新聞で見たか極つたさうだ一向近頃ハ彼方の景況を實見しおいかゝ子道「一休旦那抔を投票に入れないと言ふのハ嘘だ旦「また始めるヨ道「イエサ實の事で御座い升まづ夷曲といひ江戸座といひ世に逆らつて行くといふ御趣向が悪い丈へ旦那の其眼を拙が拝領したい失禮乍ら古道具の本阿彌で一生苦はしませんッ（圓州の胴聲にて）一眼だにも有るなゝばカチ旦「コレサ女が笑つて居ゝヲ道「是ハ怪しかる事だコサ一寸姉さんコレサ返事を何處へ失した夫なら女房とも一

寸來玉へ女「オホヽヽ道「姉さんハ何だか見た様だが思ひ出されねへテ女「向島に居りましと道「ウヽ左様〳〵ソラ旦那過般水神へ參つた時庭で見のけたのハ此姉さんで女「オホヽヽ私ハ秋葉の温泉に居りました道「ホイをう〳〵化の皮を剝れたヂヤ〳〵何時の間にかお料理が來て居るヲ英吉利の甘煮に佛の雛子焼か旦「ピフテッキだ道「此ビフテキも美味からう女「オホヽヽ御串戯ばつかり道「是ア旦那何をつけて遣のすんでナナエヽ先是をつけろヲヽ辛い〳〵ホウ辛いゝ旦「仰山な塵だ辛子を其様につける奴が有るものか道「夫なら此麥こがしの様なものヲヘエ是ハ山椒太夫だヲヤ此ビスキとやらは火が通りませんせ旦「夫が宜いのだ夫に山椒ぢやア無へ胡椒だ道「ハアナル程底でお後は菜の酢漬旦「サラダ道「へエサラダ一つが儘ならぬと言ふのでスかつ頂戴扨打止ゑハ珈琲かヲお菓子頂戴姉さん勘定毎度難有うッ旦「ヘン止度無しに嘲る男だ道「時に是から何方へ旦「墨陀の菊塢子が許へ道「ヲットト出陣ハイお帽子ハ是に有りッ

○形より口がカッレッの小僧

少焉にして追々客も入り來り東の椅子に東京ッ子口を尖らせ西のテーブルに西洋好靴を鳴す鴨居へ掛りし帽は觀工場ほど並び入口の蝙蝠傘夜店然と押し合ふ所へ這入て來るハ商家のゐん居小僧を伴て片隅へ向ひ合せ「並を頼む　女「ハイ　隱居「コレ鈍吉や手前ハまだ始めてだらう　小僧「へイ番頭さんが此間も猫文字の所へ行のを誰ふも言ふナ其代り洋食を喰せると言ひましたから私い牛がいゝと申しまして「へイアノ中川へ一所に行ましたので「へイ　隱「正直な奴だナ阿房めハ、、已が今日ハ驕つて遣るワ　小「へイ旦那も聲古なさい升か　隱「左樣でハ無いワ　小「へイヲット參りました是ハお吸物だア實は無いやア、熱ッ、、大變で御坐い升　隱「何たソップを膝へ飜したの　小「へイ此血は吸ふのにわるう御坐いまして「へイ　隱「吸ふのでは無いワ　小「ア、匙でナル程へエ此度ハ玉子燒でア、浮雲い　隱「何うた「〳〵　小「へイエ旦那は小刀でお喰んなをハ升から浮雲い口を切ア　隱「默つて居ろ　小「是ハ何だ甘煮だア、〳〵　隱「何だ騷々しい　小「へイ此肉はハけません切うとすると皿かゝはね出升へイ　ゐん「其刺すもので押へて切のだワイ　小「へイ〳〵夫から是で刺て喰ふので御坐り升か　ゐん「知た事だワ　小「此度の

鳥ハ骨ばかりでなか〳〵切れません「へイ是ハ鳥のあゝ煮といひ升か　隱「鯛ぢやア有るめへし　小「ヤア此度は天麩羅だ旦那大根をろーは有りませんか　隱「馬鹿をぬかせ皆さんか笑つて居らつしやるワ　小「へエイ、ヲット段々妙な物が來ア是ハ牛の燒たのだ横町の煮込みよりハうまい　隱「默止て喰ろといふにツばい是ア旦那三河島では有ません一昨日お鍋どんの濱た方が余ッぽど和らかい　隱「馬鹿をいふナサア早く珈琲を呑んで仕舞がい、サア菓子ハ手前ゟ遣るかゝ皆く「へ　小「へイ〳〵是ハカステラを渦卷にしたんで御座い升此密柑は一つ五厘いたし升「へイ昨日來ましたへイ此カステラは本町の旦那が昨日持て來ゝ折詰めのと同ゝので御座い升へイ　隱「エ、詰まらぬ事までべら〳〵饒舌奴だサア此氷て口を漱いで來い　小「へイとコップの水を口へ入れて瓶へ吐き出をうにすれば　隱「エ、夫は花瓶だワイ

○シチウを橫行の遊人

此方に二三品の注文は其方のけにて話しに時をうばを三人連白縮緬の屁子帶へアル

の時計をへし込ミ日本服で襟かざりといふ打扮名は琴作一人ハ前垂掛けで傳吉といふ洒落者一人は被布を着て宗匠然たるよしらへ名ハ三和「先生近頃の御作は無しカ子傳「琴作子ハます〳〵馬琴調サ子琴「イヤ流行ぉ後れてハいけ無へ宗匠なんゾハ天明時代の雑俳に遊んで萬事古人の風雅有りだが又彼様に洋食へしけ込んで改良小説の評語を聞せるなどゝ助才ない心掛けて感心だ傳「時ぉ琴作さん近頃の本に、、が打て有るのは何だそ、琴「言ひかけて少しどもるのだらう 三「腹の中で一思案有りだ傳「夫だつて此間或本を見さら「今日ば、、、能ハれ天氣、、、降なければ、、、、琴「真實に降だして來たやうだは、、、傳「一思案も意味も入ら糸へじやア有りませんか 三「月が顔を出したの覗いたのと言ふ事は尤の言葉だが露が艸の葉を踏み蔓にしさの何ざのといふ何だか可笑しく聞ゑる道理サ子、それに呆る、事半時ばかりと言へば嘘は承知で而白く聞ゑるが呆れて二三分幾セコンド斗り默止て何とも言ずに顔を見つめて煙草も吃ずに眺めて居たゞと言たら何だつまら糸へと人が言ふテだから小説も芝居も實地は困る 琴「是ハ又宗匠の宗旨論が始まつた 傳「暫らく下回の分解を聞か 三「恐れ入りま

した 琴「ホイ言ふ方が氣留守だナト精をお出しなされい 三「畏まつたホイ芥子のビンが空だが 傳「影も芥子も見ねぬ 三「ウトン黄表紙のお洒落だ 琴「黄表紙と言へば京傳喜三二などゝいふ顔で十冊ばのと出物が有るが買ひ玉はぬか 傳「それハ黄表紙 琴「眞の事サ 傳「廉あら手前がひき受やう 三「其頃あたりハれ手に入りませんかな 琴「此間氣質類をやう〳〵二三部探し出えた 傳「底で氣質の行方知し上ハいざ鎌倉か子 琴「そう貴公のやうに交てハ止なん〳〵 三「ナト柳樽の注解でも伺ひに出やうか子 傳「柳樽の注解より過日のれ文ハ是非宗匠の御注解が入るわけで 琴「へエ何か 三「先生に言ふとまゝ書れさうだ 琴「書きやせうぐつと所謂三冊もの先宗匠と男を宜くして 傳「一部の主人公だ 三「まづ冒頭が有たい糸野に捨た笠に用あり水仙花夫ならなくに水仙の霜除程な侘住居カ 琴「見る人推して知るなる可しッ 傳「サア行う〳〵

思ひ〳〵ゟ歸り行あとは血を片づける音カタリ〳〵

○滑稽百漫雑辨

しつぽり濕るゝなど、言ふ意氣な春雨の世界とは齟とお月樣に直段の出たる秋の中浣

或夜小雨のしよぼ〳〵と世の靜さを降り盡し寂を盡して晴間無ければ可惜一日を茫然と欠でくらす娛生樂食ては轉倒根岸の里も住めば都と主人の化七二合半酒ふ醉加減な口三味線のトツチリトン其嚊チイと掛聲で戸を開るのハ隣家の木兵衛「アヤア相變らず能い御機嫌山城大和　化「酒でも些參らずばタ時に木さん堂だ儲かるカ　木「イヤモウ何れを見てを秋の夕暮でサツパリ浮氣へマヽア其な泣言ハ止めふして何ぞ珍談を聞きたい化「珍談ゐら乘所に困る程有るヨ何にしろ惜しいが一杯　木「迷惑だが貰はう　化「ヘン能く出來て居らアト酌をする後邊へのつそり頓吉といふ男「ハヲ錢の無へ癖に大分氣張るの　化「オヤ何時の間に來たのだ憚りながら庵中へ案内も爲ずに來が有るか　頓「フム案内もすさまじい一枚障子の玄關が折悪破れて奥御殿から蠻所から上總房州迄一望とは成程感に言ふ紙ハ見通し　化「洒落るな〳〵ゐら家でも住めば我城廓といふ理木「城廓へン其なら大手は有るか　化「無つて先入口が大手なら蠻所と昇降手數居の堀を越して這入ると火鉢の二の木戸三の木戸障子へ張た弓を見れば取りも直さず是枡形頓「借金取が押し寄たら戸棚へ立籠るだらうヘン呆れる　化「悪く言な城主だア　頓「さ

ぴた刀の折れでも持てか　木「城主の好な赤いはし　化「ソラ亦口地が始まつた　頓「其ハ能が紋切形に何ぞやろう　化「卽席落語は何だ　木「よし〳〵極變な外題がいゝせ　頓「エヘン早速ながら化物を一所に酒を飲だといふ實說を聞せやう　化「イヤ其あ時代な話れ後にして雷の藪妓買と言のを辨しろ　木「ドツコイ其な時代ハやめにして束髮に附ての珍談を聞せてへ　頓「オット其な　木「時代ではチヨッ交るない　化「早くしねへと日が暮るぜ　化「くだらねへ爭ひハ止て順番にやらつし　頓「先づ始めろ斯だト居り直して「エヘン俗世には不思議な事が有るもので私しが淋しい晩或寺の墓場を通行すると化物が酒宴を致して居りやしさア此奴には欠落者が交番所に出逢た樣に愕然とは致し升たが此處ぞ膽力の据處と腰を屈めてモシ御前方は能事ををいヤス子些御仲間入を願ひたいとやらかしたら化物連ハ思ひの外大悦びで早速盃をさゝれまーた故戰々乎ながら雪女郎の御酌で飲んで居升と又候髮を振亂た、女が來て頻に勸め升て然ー此方ハ足腹遣かしました事故さま〳〵斷り升とオヤマア御弱いと其なら一拳行さましやう負け飲みですヨウと乙力に持込で來ました者だから此奴洒落た

奴だと存じ早速平常の手並を顯し掛け升とアレ其な面倒なのより早いので行きまや
うと言から其なら虫拳かシャン拳かと聞くと妾達には柳が附物でサア化「妙々（木「
面黒いゾ化「此方の番かオッホン差代りまして雷公の藝妓買と言ふのを聞き出しまし
たかゝ一席申上升月日は忘れましたが或夏の事雷公が頻ゝと稼ぎながら下界を眺め升
と恰かも宜し隅田川邊に屋根舟が一艘ぐら付て居りやしたて其處で先生サト眼尻を下
て中を遠見すると素敵お別嬪が一人正体も無く寐て居ると言ふ者ゞのゝグッと粂仙の
様な氣持に成一番此女を電の鍵で引掛て遣うと雲を踏しめた所れ宜かつたが引掛る
處かとう〳〵此方が素顛轉乎と舟の中へイヤ、チャン、天のゝ落た變人か私ちやいやゝ
の木「オイ〳〵鼻唄どこじやア無へ其から化「ナニ馬鹿らアしいッ頓「能加減にさつ
しナ化「マア底で御聞あさい雷公れ何と厚釜敷も腰を摩りながら口説た處女も飛んだ
化猫で直に應來と二つ返答サテ常日は結ぶの雷も今日は結ばれる雷で其儘ごろ〳〵と
轉もしたと思ひ玉へ然り而あて後雷公は何れ其中と歸りかゝると猫的れ變な聲でモシ
雷はんへ其なら確實明日御出なはいヨト念を抑ゑ乍ら特前の無心をしかけたので雷公

は鼻の下を延し仲間の奴等が無心なら左樣旨くれ虎の皮の褌とやる處だが貴女の事だ
かゝ是を遣ろうと褌を外して藝的の前に置き急いで天上したら月の兎や日の烏が見付
オヤ雷州何ぁゝ氣の無へ顔をしてウゝ見れば褌が無へが借金の形にでも取れて變さの
虫かと言ば雷公苦笑ひをしながらナアニ辭ぐどころか已ア降に成と勢ひが出る哩頓「
古い〳〵化「其あゝ来だ有る木「イヤ話しが有ても餘白が無へから又次號として一先
づ中止怪談〳〵頓「サア〳〵餘白が出來たから其後を聞て仕舞をう化「其かゝ翌日雷
公い人眼を忍んで藝妓の家へ行くと娼買柄で眼が早くオヤ雷れん能く御出なはいまし
た餘り御遲いから御忘かと思つて「ナアニ貴樣の事を忘れて堪るもんか「オホヽ持前の
太皷を叩くのはおよしヨ其は能がお前れんを知ての風神はんに見付るといれ無いから
御這入りアレサ早く御あがんなはいヨと云ふと雷公は苦笑ひへン今下つた許りだアナ
ト此奴は何だ木「其奴は悪い化「へンお始めくサア後を聞う木「是からが正眞の落し
語で御坐い化「此奴が〳〵一人で味噌をあげるナ木「東西底で私のと實說故極手短に
辨玄升がエヘッ去る家に西洋好の下婢がありやして平常ゞ出位いやゝかし又頭れデコ

〳〵の束髪に爲て居り升テ然るに 頓「強氣ふ堅ぱ 木「不斗しと事かゝ飯炊男と心安く
なり或夜忙しい中を抜ゐ出して男を近邊の明地へ伴出し卯を布團に痴話か口説か誤多
付さと思ゐつし 頓「ソヲ化公涎が襟を綱渡りだ 化「馬鹿をぬかすから 木「其から少焉
あつて家へ歸る途中で子供が頭を見付チヤアア來見ろ彼人の頭は犬の糞のやうだワアイ
犬の糞やアいとはやし立ゐれ何と聞たか下婢ゐ驚愕頭へ手を遣てゝ喚ながら最う是か
ら卯原ゐよそう 化「ヤ茶ばくろい〳〵 木「何と奇妙の〳〵と肩を尖がゝかす折かゝ障
子を開て圓社の探訪開八が首を出し何だ〳〵 化「何でも無へ珍談を話つとサ 開「實説
か 化「實見したのもあり法螺もあり 開「うさアねへ是が嘘も見たも一所と言んだ 化「
アハヽ出來た〳〵 開「甘からう 化「イヤ洒落の事じやア無へ百漫辨の結局がサ

○敵討あとの掛金

頃ゐ些足ぬ天保年間恐れ入谷の鬼子母神にて親の彼を討ち取さる古今未曾有の洒落者
有ける其原因を尋ぬるにも今を昔の世盛りや岩戸神樂の始めより滑稽ならでゐ夜の明
ず洒落で堅めし玉鋒の道は一節三節ほど足ぬ同士の寄合ひなる月日の本ぞ面白き臍は

袋に頤ゐ鞘治まらぬ世も治まりて笑ふを常の都のさま嵯峨のあたりゟ隠れ住む花下長
四郎と言ふもの有り大坂天滿の眞中で傘屋の森右衛門と言る道樂者の子なりしか親爺
ゐ大の笑ひ上戸一宵余りの可笑き話しに臍を痛めて頓死せしかば長四郎は詮方なきに
女房を伴て京の住居生得嫌ひあ商賣なれば却て夫を宜い汐に今ゐ地口の點者を成して
可笑しく月日を過しけり外山も笑ふ春景色風に吹れてのつろりと長四郎が庵の外先生
居るか居ないかとうそ〳〵覗くゐ地口の門人午吉長四郎の顔を見るより走り込でむづ
と坐しいな、く如き聲を出し先生うまい事が有る家に居る時節じや御座らぬ馳走が有
かゝれ出なんし桔梗刈萱女郎花と聞え升が如何で御座ると言へば長四郎は顔をふくら
し何かうまい話しなら地口處の判然と話して聞せヨト苛立ば午吉は咳ばゝひを先序ひ
らきの紋切形爰に赤豆大納言と申すやごと無き滑稽の看居しまず此館の家例として四
季ごとに滑稽神の祭りを行ひ家中の滑稽を勵さん爲め或は地口洒落は合戰晩め競の試
合あり今年ゐ大祭を行ゐれ來る二十八日ゐ尻の用心小用心とゐふ滑稽の日なる故京師
の滑稽熟達せる人々を招のれて睨め競の大試合晴の勝負の有るを聞へ先生が是道戯師

ふてゝ一流の師たる御腕前あり何ぞ出陣し玉ゝざる其日もはや明日にて候ト聞もあへず長四郎ハ活惚踊りをなす如く線香烟火を眞似るが如く兩手を振て勇み立ち斯る試合の有る事を知ぬ我こそ鈍なりけれよし〳〵明日ハ多くの奴を笑ハせ殺して呉んせと言を聞より午吉を先生の威を頭にいたゞき日頃の腕前あらハすが翌日にありとは有難山瑞と鴉の夫るゝで飛立つ思ひ思ひ立つ其吉日は今日ばかり今や出世の門口に咲く優曇花の花下長四郎晴の試合の睨免競後れを取ば名折れの小口頤の掛金しつかりとゞて外すな合點かト申し合せて師弟二人は翌日の試合を待わびぬ畢竟睨め競の試合勝負如何ぞや法螺を承知で聞ねかし

峯の櫻も春來ねば人の跳めの花と成ず空の月も秋に逢ねば人を寐さぬ位つかず況て一すの虫五尺の体時を得れば用ひられ時を得ざれば只徒に埋るゝ木どゞなるものを今日は如何なる時津風日頃の手並をあらハして肩で風をば切てくれんと思ひ込みたる花下がくるふ心の午吉をうち瞶へてこそ

行空の雲井長閑き春景色豐太閤の仰せにて數寄者を廣く召れしハ北野に名高き大茶の

湯是ハお腑で茶をわかす睨めッ競の大會に催し主ハ赤豆大納言金時卿とぞ聞えける今日集りし其中に睨め上手の人々は何茂入内欲無足尾踏太兵衛板過大口聞次郎好也是等を宗徒の强兵にて其外家中の面々沖野倉吉生田外道次猫野眼太郎柵唐牡丹吉逸齋空約あんど一風變りし面擁え若し此圖居を箔屋に見せなば大きな損をするならんと時の識者い評しけり勝負を促がす法螺のひゞき空鐵砲の音と共に東の方より進めると何茂入内欲無顏ハ瑕の如く片眼小さく片眼圓に髮の毛は十筋右衛門と言つ可き是無双の兀頭此方へ出る沖野倉吉活惚踊りをなす如く兩手を振て畏ればヤット引たる行司の圓扇互ひに劣らぬ道戲者ウンと睨めた其顏は閻魔大王も腹を撚る可く毘沙門天も顏を外さんと見ねたれど双方ぐッともすッとも言ず「是ではならぬと入内が早速に巧む二本指眼をつり上げてすり寄ハ「心得たりと沖野倉吉口へ五本の指を入れ鼻を上へおし曲てつき出したる其顏ハ何とも彼とも言やうなき變法雷なる顏付に流石の入内も堪りかね「ハゝゝゝと吹出せば棱數に見物せふれたる大納言金時卿を始めとして數百の見物一同に思はずどつと笑ふ聲天地にひゞく斗りなり入替つて此方より足尾踏太兵衛と呼出せ

ば此方より生田外道次と名乗て走り出くる一人の猛者實ふ名前とは違はざる貌も生きたる外道次が三十五座を其儘、天晴變な貌付よと賞辭絶間無りけり其時足尾踏太兵衛は「參るぞうと呼かけて方一尺の四角な貌を圓くしたゞ長くまたりいろ〳〵貌ふ手をつくせば此方て聞ゆる生田外道次未だ五分もたゝざるうち踏太兵衛を「ワッハヽヽと笑ひ倒して坐を退く又も大口開次郎此方には猫の眼太郎呼び出しの聲につれしづ〳〵土俵へ向合ぬ此勝負いまだ畢ふざれど巻をあらためて次行に説ん看客靜に聞ねかしチホン

再説 兩人は双方負ず劣らずの變な眼口を動して命限りふ睨合しが名にしぬ大口開次郎が多くの婦人に嫌れたる間抜一番の濱氣顔に猫野眼太郎ぐる〳〵と眼を廻せども敵し兼ニヤンの苦も無く笑はせられより後より出る棚唐牡丹吉牡丹餅面をつき出せバ彼方は茶道の遯齋空約坊主頭を振りたて、此處を先途と睨め合ふ行司ハクズ〳〵褄蹴ハガヤ〳〵笑ひたてたる見物を物とも思はぬ両人が真ッ赤ふ為て詰寄〳〵身振手附の秘術をつくせば行司も今ハ得堪えずして腹筋を抱え乍ふ引き分とこう觸たりけれ其時

西の揮へ内より動ぎ出たる一人の變物是如何なる面揮ぞ但見る馬蹄石を轉がしたる如き凹凸の上へ瓢箪の如き瘤を三つ四つぶら下げ眼は蚯蚓の荒れたるに似て口は南瓜を喰かきたる如し一度笑へば三才の童子も腹を抱もる是一個の大丈夫圖々珍聞の社員にしたら何よりの變物やト樓敷の上下押しなべて等しく笑ひのゝしりけり扱も彼勇士は土俵狹しと座をし免て調子外れの聲高やかに「是は變挺な顔を以て赤豆大納言の寵を襲むる滑稽流の指南役當時都下ふなふぶ者無き苦虫粒四郎赤貫とは我事なりいざれ合手に罷りならん誰にても進み玉へト扇を腰より抜き出してバサリ〳〵とあふぎ立れば「シャ惡き廣言かな笑ひ殺してくれんずト何れも土俵へ出されど一度顔を見る時は吹出さぬ者とて無く矢面ふ立つ道化者は一人も無りけり最前より人に紛れて勝負如何と窺ひたる花下長四郎是ぞ宜き敵手なめりと躍り出たる其光景苦虫に劣らざる又是無双の間抜顔「我こそふ合手出仕らんト苦虫に立對へば「偖ハ宜き敵御參なれいざ參らうと睨み合たる其双方の顔付ハ古今未曾有日本始めて又とは有ぬ變な面ゞと看客顔を痛めけり兩虎戰ふ時ハ必ず一方は疵を蒙るものとかや苦虫粒四郎が今日を晴と睨み詰さ

る必死の面を物とも思ハぬ花下長四郎三四寸の鼻の下を飴の烏の如く引きのばし口を曲たり尖らしたり引ばつけ入り進めば睨む勇者と勇者の睨め合にハ寸分の際あらばこそ等しく睨みし眼も動かをず将に是社頭の駒犬か武見の岩かと見る眼もまやに行司ハ頤を両手でおさへ見物ハ臍で茶を沸し何時果可しとも見えざりしが少しの隙を得たりけん花下長四郎はツイと進をて「ウヽンと一聲睨みつゞれば堪へ〳〵し溜笑ひクスリ〳〵と口へ出でハ流石の勇士も思いず知ずフット吹出し笑ひ出せば「得たりや應と長四郎秘術を盡して詰寄ば苦虫粒四郎は後へ倒れて「ワッハヽヽヽ参りました。ワッハヽヽヽ。アッハヽヽヽ「思ひ知たか「ワッハヽヽヽ参つた〳〵。ワッハヽヽヽト笑ひくるしめば機敵より大納言笑ひ過たる眼の中感涙を流し玉ひ「手柄〳〵と褒玉へば四方ゟ集へる家中の面々「ワッと斗りの笑ひ聲と共に賞賛したりける斯て赤豆大納言は花下長四郎の一騎當千なる面つきなるを感じ玉ふ事大かたならず新地百石を賜ハりて家中の笑ひ指南役とし玉ふ由に長四郎ハ喜びに堪ず是より赤豆家へ出仕して家中の尊敬をうけ飛ぶ鳥もおとし頤も落す勢ひとぞなりける爰に辛虫粒四郎ハ花下が爲に晴の

場所にて笑はせられ頤を痛めて引き籠り居りしが今は君の寵も無く盛衰忽ち地を替て花下長四郎が指南役と成りしを聞くより妬く怨めしき事限なけれバ已れ花下めいつか怨みを返してくれんと窃かに用意をあすとも知らず長四郎は君寵日に〳〵ゟもくたのしき日々を送りしうち妻のれ洒落ハふと心地例ならず不思議や臍が西國すると夢みて鄙簞の如き男子を産みたりしかば長四郎ハ重ね〳〵の目出度さに手の舞足のすべるも知ず簞次郎と名付けて這へも立てと言ふより笑へ〳〵と育て上けたり此子親に似て天晴無類の顫挺男子なれバ實に南瓜の子に糸瓜ありと賞ぬものとてなのりけり。今日ハ簞次郎の誕生日あればとて長四郎は門弟を招き夜の更けるまで笑ひ遊ぶを聞くより辛虫粒四郎ハ待ちくらしたる上首尾と意趣返へしの支度くして花下方へ押しよせぬ苦虫粒四郎赤貫は迷ひの雲ゟ蔽れて心ゟも無き惡事の段坂過般笑ひ負されし花下ふ怨みを復をんと身輕出立の草鞋がけ田舎芝居の定九郎に一段劣りし風情なり夜もハヤ亥中の鐘の音に人足絶し郎町彼長四郎が住居なる塀を苦も無くふぐり越えゟ定まりの松の木を小猶に取て窺へも酒宴て今を盛りにて詫ひつ舞つうち笑ふ聲さへ高く聞ゆる

にぞ粒四郎ハ舌うち鳴し斯う大勢に居られては笑ひ負るは必定たりやでや寐床へ待伏して寐にくるところを一笑ひ願を外してくれんずと彫り笑する折しもあれ庭下駄の音カラ〳〵と立出るは花下長四郎飲ぬ酒を強ふられて苦しき酔を醒さんと漫歩行の千鳥足見るより粒四郎ハ躍り出聲をもかけず後より孫て用意の一物を長四郎の口中へおし込ば〳〵ラ怪しや長四郎は忽ちアハ、、、、と笑ひ出し踊りハね飛はねてもあか〳〵止らぬ笑ひ聲「アハ、、、何者なれば後より揶揄し笑ひとハ卑怯あ奴め名乗〳〵アハ、、、、アハ、くるしいアッハ、、、、ト轉廻つて笑くるしむを粒四郎は悠々とうち見やり「誰でも無へ粒四郎をまだコレ睨免くらでハ宜く笑ハせたナ其意趣返しをしてくれう」と間を覗つた今日の祝宴力づくでは敵はぬ故今呑せし其鶏は笑ひ聲と言ふ聲喰ふものと笑ひ抜て忽ち命を落すとやう「エ、アハ、、、、、、「笑へ〳〵ハテ不思議な藥も有る物だナア「アハ、、、扨は汝ハ赤貫ヨナ顔づくでは行ぬと思ひ毒殺ではらはすとハ古今無類の滑譽者めがアハ、、、エヘ、、、、口惜しやおかしやと齒を喰ひしめわゝひの涙忽ち顔は外れけり粒四郎は立上り此上は此方に足は留られぬ見咎められぬ

其中に些も早くヲ、左樣だト行んとしたる出合頭長四郎の妻お洒落が「ヲ、我夫か何をしてふ出ぞト袖を引を粒四郎は南無三寶と逃け出す此方へ猫の眼太郎「御主人かトすかし見る月の朧の暗まぎれ「エ、面倒ト粒四郎がわゝひ聲を早速の眼つぶし猫コリヤ曲者ぞれ合出なされアハ、、、、何だか口へアハ、、、曲者だアハ、、曲者が口へ這入たアハ、、、トくるしむ內に粒四郎垣根の穴かゝツイと拔け闇はあやなし怪しの姿搔き消す如く逃行きける後に氣のつく眼太郎れ洒落が探りあてたる死體の上「ヤ、、、コリヤ蟇蝦だ花下長四郎は粒四郎の嬲し笑ひに腹の皮を撚暫〳〵氣絶をしゝりしがお洒落と眼太郎の介抱ふてやう〳〵と我に返り笑ひ過たる眼中の涙を袖にて拭ひ乍〳〵吹き出す如く嘆息し「我滑聲に名を揚しより向ふところ敵無く笑ひ敗ぬものをらじと思ふ油斷ひし今宵の敗北不意の笑ひといひ聲の效能と言ひ心にもあき笑ひを發し氣絶せしこそ口惜しけれ此上は粒四郎に笑ハせられし返報せん其所退けやツト立ち上れバ眼太郎狼狽て押し止め「這ハ御短慮なり止まり玉へ彼粒四郎は一騎當千殊ㇾ大膽ふも御邸內へ忍入りて嬲ㇾわゝひをしたりし上は此地を立退く心ならんかゝれば今

馳付て一笑ひと思はれても先が居られねと六日の菖蒲たゝ氣を長く時節を待て仇を返ず
が必要に候はずやト上り眼下り眼猫野眼太郎一生懸命鹿爪らしく述れど長四郎も實尤
と笑ひを押へて止りけり春と明け秋と暮て長四郎の悴辈次郎はハヤ二八の春を迎へ滑
稽痴客は親耻かしき成立なるが親長四郎は笑てせられし粒四郎の事を折々聞まゝいで
無茶修行して敵の所在を尋ね親の爲に怨みをかへさんと兩親へ別れを告げ門人眼太郎
一人を伴て旅立ける急がぬ旅の事にしあれば一休旨呂利の古跡を探り或ひい名ある滑
稽家を訪ひ睨めくらの試合あどして行〳〵東都へ着ふける宏に天谷の鬼子母神は洒落
の元祖と聞ね何うで有馬の水天宮堪忍信濃の善光寺と並びて利益ありけると聞き兩人
は一夜神前に通夜籠りして敵の所在を知せ玉へト一心不亂に祈るほどに不審議なるか
な馬鹿ゝきかな忽ち一人の阿呆らしき男顯れ「如何に兩人汝が尋る敵へ今此近
邊に有り幸なるかな毎朝參詣に來るなれば翌日の朝を待可しと教へしと見しは是は
お定まりの夢なりし兩人ハ奇異の思ひをなし敵が毎朝に來ると知せし彼男は是鬼子母
神の御使ひおゝん實に恐れ入谷なりと感ト て明るを待ちわびけるが上野の森をはなる

、烏滸卿寺の鐘の聲間も無く夜はゐの〳〵と白みたるにア「スヲ示視通りに敵が今や來るならん眼太郎油斷をするまいゾ「合點で御坐ㇾ升もう笑ひ草を喰せやうと笑ひ藥を呑せるとも滅多に笑ひは致し升ぬと刀にねろぬ顏の目針をしつかりぐて待かくる折しも近う聞ゆる物音人の來れるけゝひゞと待かまへたる師弟兩人神の示現を笠に着て大旱に雨を待思ひ此方ゝ夫と知や知ずや卿の白露踏わけて我から亡ぶ身なりとて思ひ設けぬ夏虫の虫の緣りの苦虫粒四郎あとを濁をぬ聲へとゝ打て變ㇾし鳥居の下人目を包む手拭に隱す顏ひも果敢なさの祈りに今朝も鬼子母神スヲ苦虫ゾト此方の兩人躍り出たる聲高やかゝ「ヤをれ苦虫粒四郎過る年汝が爲に笑ひ負たる花下長四郎が悴を忘れゝせまじ俤に天を戴かぬ怨みの笑ひを復をんと長き月日を過せーも鬼子母神の示現ふ依て狗り逢ひしゝ最屈覺浮木の臍や優曇花の顏待得たる今朝の幸いざ尋常ふ勝負〳〵ト言ふ尾ふついて眼太郎も力を添たる腕まくり「若旦那の言ふ通り此眼太郎も師匠の敵笑ひ怨んと此年月を憂難難此處ゝ所も入谷村其朝貌の朝まだき金の蔓より敵の蔓に思ゝず藍の絞り咲智惠を絞りし心勞の昨日に今日は變り咲忠と孝とを染分

て紅よりも赤い心の丈其方は莠む日影の朝貌其方は日の出の一番咲なづ一番ゝ若旦那次にひかへし眼太郎は後に心を添竹の直な太刀先笑ひの貌付うけて見玉へ粒四郎ト滅多矢鱈に喋舌ば粒四郎はカンラカラ〳〵と打笑ひ「ぬかしたりな二人の奴根も無き事を根に持て茶ん茶羅可笑しい敵呼ゝり望みとあらば後へはひかず鬼子母神の社前にて恐れ入谷と言せてやらん敵うちとゝ洒落過て臍が臭れる其一言淺茅が腹の撚るワ〳〵一家ならぬ一つ笑ひ二度とゝ言せぬ睨めて見よ「シャ面倒あ眼太郎つゝけト兩人一つにう ち向ふ一人の合手に二人の貌何れも負ぢ劣らぬ面つ 已晝時こそあれ孫次郎は未だ若氣の滑稽盛り箸が飛でも笑ふといふ世の諺に等しけれも老練なる粒四郎に睨めつめられ押しつめられアハヤ吹き出さんと見るうちに猫の眼太郎早速の早業粒四郎の脊中襟元手當まかせにころぐれば 粒「コハ卑怯なりアハヽヽヽ 孫「親の敵思ひしつたか」粒アハヽヽヽ 眼「師匠の敵 粒「アハヽヽヽエヘヽヽヽウフヽヽヽト苦しむ粒四郎心地宜や有難や首尾よく敵を笑はせたりとまづ〳〵安堵の兩人ゝ等〳〵貌を見合せて「ハヽヽヽヽヽ 粒「ハヽヽヽ 孫「ハヽヽヽエヘヽヽヽト笑ふ門には福

來るわらわぬもの、有る可きや首尾宜くわうひ納りー此物語りも目出度〳〵

○滑稽金次第

世の中ハ酒と女と金が敵と誰しも言ど何うぞ敵に巡ヱ合ひ返り討に成て見さいと思はぬ人はあか〳〵に城を傾け國を傾けるの色も盃を傾れるの酒も金が皆迷わす問屋なるに卸して貰ふ人多く喧嘩の賣買戀路の取引き皆是より始まりて大切な身體を惡事といふ飛ざところへ抵當にして一生の損を招くもおかし其境界とて雪と墨田川の邊りふ旋毛と同樣曲りくねつた庵に風流を樂む能樂屋若樂吉とて親も無く苦勞も無しの若隱居十圓の金貨は塵と同樣に思ひ百坪の地所ハ掃溜視して米の直と晦日を知ず年來預し銀行の金もハや五六十萬圓と成り鐵道の株は何千何萬と讀れ貨金の高が八九千萬圓地所は百萬坪も持ち彼義太夫本に有る持丸屋長者兵衛も是ふは及ばじと見るまでの金滿家朝夕の食は山海の珍味を足りとせず玉を炊き桂を焚く驕に人の眼をふさがせども苦樂吉ハ何うした表裏の串談か瓢箪か美味珍膳が口ふ飽き何うぞ下等の料理をやふかし度と明暮歎にうたつて居ても思ふ樣には成ぬ悲しさ金が絕間無く儲るを獨りくにして

兎さま角を思案をすれど斯々しさう損をするか彼したら金が滅かと只自分考へで詮方なき折しも同じ金滿仲間で欲野梨右衛門といふ男

梨「今日はお宅かナ何うで御坐ハ升近頃の御樣子は

苦「是はお出なせへイヤ何うと言て彼と言て私ハ金の湧て來るのに辟易して居るのだが何ぞいゝ儲かうぬ口は有なそめへカ子

梨「左樣サ子夫ハ私も探して居升のサだが子何といつても上景氣な世の中だから僅百圓損をしやうト言てもする口が無ハと言ふ怖い世の中ッ

苦「ハテ困つたものだ今にも晦れ〳〵の樣な金持は立行なくなるテ今のうちから覺悟をして置ねば成ません

梨「大丸に〳〵時に此間もちつと計り內職半分に損をするつもりで前へ長家を四五軒てしらへて店賃を此方かゝ出して遣方法に極たから借れ家と書て出して置たら何うも店賃が多いと言て來んだ

苦「今時の人は油斷がなりません

徳野梨右衛門は首をいろ〳〵にひねくつて見て漸く膝を進め

梨「兎角人の損をするものはまづ相場で御座るテ此間も横町の猿吉が三万三千圓はたいたが彼も相場の下落で投り出されたので

若「爰ましい事だア底でお考へゝ無しかヲ

梨「まづ相場にかゝつて損をするのが一番かと存ト升テ

若「ナル程夫も左様だが併し斯いぬ運のわるい同士だから萬一ひよつと儲るとも言はせぬ底で私の思ふには何ぞ外ふ大山石尊をやらかして六根少々でゝ困るが一ぢきに損をして見たいものでスナ

梨「ハテ夫が容易では御座らぬアヽ弱り升テ一体ヤレ滊車だ滊船だと一分か二分のうちに三四十里も馳出ーたり又は万圓百萬圓の品も車をまゝせばヒずか一日か二日で出來るといふ金儲けの揃つた世の中で何故損をする器械が出來ないからんハテ扨開けない事だ私なゝばヤリ升

若「ハヽア損をする器械とは何な器械だヲ

梨「知た事何も彼も出來ぬ器械で御座る其外日に一町ぐらゐも走れる滊車をこしらへたら損をもる種で御座る

若「左様氣がついたら早速やりませう

梨「イヤ夫より宜い事を思ひ出した會社は何うでスナ

若「會社とゝコリヤ損をするにゝゝ思ひ付だ

梨「まづ名を大日本破産會社と言ひ升

若「シテ目的ゝ

梨「七六づ樫い事は御座らぬ一月ばかり遣て潰して仕舞ふのだから何をでも致して置れ升ウヽ破産せぬ様に貸しつけ金をそるといふ方法にでも致さう

若「株主を募れバ金が這入さうでゝ無いの

梨「底にうまい事が有るのでズ最初は金を欲がやうに見せて無暗と株をつのり其金を持て社を逃出して家へ歸つて知ぬ顔で居るのぢやハテ大勢押掛て來たら其金へ十倍の利をつけて解散といふ手都合に仕升さし引會社の建築其外の入費で三

四十萬の損ヶ諸合だ

ト聞て苦樂吉ヶ一向分らぬ乍らも損の行事故賛成〳〵何時も十三月一日發免の新聞紙上に大日本破産會社と二號文字にをのして兎屋も宜しくと言る廣告しさるヶ是慾淺連の兩人が催したる會社にして其規則ヶ漠として烟の如くなる會社なれバ株主に成とい ふ人ヶ有まじきに思ひきや其日より申し込人少からず

英雄の出る世には英雄多く名人上手の出る時ゐれ や此頃金の多過て困る時節あれば「是は妙な會社だ 有るか分らない「是と危い社だ「直潰れさうな會社だなど、見込をつけて金ゐ不足あ る連中が寄る氣で申し込ミ保證金はおろか株金も先へ拂はうと我も〳〵と出す金ヶ藏に餘り座敷に溢れる位なり

破産會社には頭取慾野梨右衛門副頭取能樂屋苦樂吉金貨の中で眼ばかり光らし

苦「梨右衛門さん何だか滅法冷る日で御坐い升ナ

梨「其筈サ○たらけで御坐るものヲ

苦「此○を減す事は出來ないヲ

梨「然ばサ初手は持て逃るつもりだが此高では仕方が無いマア何もせず○を取たまゝで居るが宜しい

苦「ナル程株主が怒つて來たら十倍の利足をつけて解散かヲ儲からぬ口にやつと有つきましさ

梨「何ふしても前祝ひだや一杯飲うだヲ

苦「○の出る事なゝ大賛成だやコレ〳〵小僧

小「へイ〳〵

苦「コレ酒を買て來い昨日の酒は安直つていれねへ

梨「困つた奴だ○箱のそばに居ながゝ何故ちよろまかして持出ねへのだ

苦「此節柄だから成可く驕れヨ

小「へイ〳〵驕り升〳〵

梨「小使の出額臧は何ういうした

小「へイアノウ餘り溜つて汚いと申して壁や板の間へ積つゝ銀貨を掃出して居升

若「感心な男だナア

誰しも金と云ば欲がる者なるに其又金を欲がらぬ世の中ころ而白れ能樂屋若樂吉の組織したる會社へ申し込入殊に多く集る金も多しとて兩人は頭痛にやみ何うぞ遣ひ込で損をしたい者だト毎日〳〵損をする事のミ相談するうちハヤ期も近うありて株金の利益を配當するといふ日ふなりをかば兩人は喜び此時に乘じて利も遣ずふ逃て仕舞たら定めを行〳〵は此方の懐中に大損が有るだろうト示し合して或夜會社に有ッ丈の〇を取り出して已が家へ運び兩人へ先しめたりと胸を撫て株主の怒鳴込で來るを待しに翌る朝になりても其又翌日になつても出入の商人より外には來る者無きも理りや株主連へ最初より怪ゐい社と見たりしより成可く多くの金子を出して厄介拂ひをしたと言て居る位の〇嫌ひなれバ會社の頭取支配人が株金を持て逃たト聞て一同喜ぶ事大方なふず一大祝宴を開かんなどゝいふはどなるふぞいよ〳〵困る兩人がかて、加へて大金を背負込み何うしたら智惠が井出の里山吹色に困りて、

若「何と梨右衛門さん飛だ事になとまたナ一体斯成と知たなら正直にサッパリと返却して仕舞ば宜つたものを利已主義をやらかしたのでイヤハヤ

梨「是は一番悪のつた併し太い奴等で御座るナ今ふなつて〇を請取うと言て來ず風説では何うやら株金の損をしたのを嬉しがつて居るとやら聞ました

若「是ハ呆れた事だ

梨「何とか工夫して掛合ふが宜う御坐る

若「代言でも依頼ませうかナ

梨「イヤれ待なれ〇をくれろト言ふ對談なら正當だが金を受取て貰ふといふ掛合だからむづかしい

若「昔〳〵と何もいさくさ無しに濟のだが今の様に金の有り余る世の中だから困り升ナア

梨「何にいたせ葉書で催促を出して見ませうテ

若「葉書でハいけますめへ

梨「ハテいけ無れば葉書代の損だから猶結搏ぢや
能樂屋若樂吉より諸所へ出したる催促の手紙が届くと等しく株主連れ大いふ立腹あし
己より持逃をしたる金を受取とれ無法な奴ぢや左樣いふ道理れ無いと銘々理屈を言ひ
張てなか〳〵受取る樣子無く殊ふ葉書の代は翌日辨償して來たのでゐよ〳〵兩人は泣
貌を峰れおろか栗の毬でたゝのれた樣な心持ち代言人を依頼で掛合て見やうかト相談
をしても見たれど何にしても事件が事件だれ廣い金ではウンと言ず萬一負にでも成た
時にれまた幾何のの金を背負込ねばならなれト一大騷動此處に現出しより
若「何うも止ム宜つたものヲ梨右衛門さんがい、樣ふふ勸めなすつたものだからと
う〳〵儲け口となつて仕舞た
梨「私しも此樣に儲る口では無と思ひましたので遣て見さら大違ひだ何うもお氣の
毒ナ
若「今更くやんでも仕方が無いが斯ふつたら俛迄も掛合て見て行ぬ時はせめて半分
なりとも受取て貰はにや成升まいと思ふが何んなものでせう

梨「マア此處ふだヲ
若「ろして是から何ぞ一番山仕事をして此金を散してお釜を起をにやおよない
梨「ヲ、それ〳〵其處だヲ
若「車力が坂へかゝつた樣にウ、腐だアヲ、腐だトばのり言て居ても分らないお考
梨は有升まいか
梨「左樣サヲ先何をか當りをつけて申上よう
若「何分おたのみだ
ト相談して其後は新手の商法と舊會社の談判に奔走するうち所々へ貸た金を捨たつも
りふ思つてゐるものを悲ゑや利足を定めよりも餘計に添て何家も〳〵返濟の期を怠ら
ず夫故にます〳〵殖るは金ア丶何うしたら宜らうと首をいろ〳〵に曲て見も會社の失
策より儲かる癖のついた兩人なれバ商法でも何でも當るばかり追〳〵入くる金高は千
萬二千万三千五百萬の運中が金を苦にする世の中の逆をになるおろ目出度れ（完）
滑稽も金といふ字が問屋なり見ば笑ぬ人とてなき

○當歳法螺福引

鴉の勘左衛門お早く〳〵と飛び出し雀の忠助まづ軒に囀なつ、み井ひら〳〵車の綱は今年へ〳〵るりと廻り元方棚の燈明皿ハ去年の灯を殘す内ふは雜煮の杉箸太し〳〵外には門の松かざり高く二本ねつ立つ朝の起きど、ろは外に類ひも新玉の春なれや笈ふ今朝のみ旭を拜むと云ふ遊人子の助常は正午まで子の助あれど元日だゞに珍らしく明ぬうちから歯を磨き仕舞ひ「アッア元日や上々吉の淺黄空ッ古人の句も思はれるト獨り言たる門口へ「御慶申そハ古めかしいが能樂吉出仕いたえたり「イヨウ店者の廓詣りと來て早ハナ〳〵 能「夫ハいゝが妙な事が有る御主人の頭ハ大晦日此方チト藥鑵ふ成たやうだぜ子「へエ又一つ年を取たかゝか子 能「ナアニ先へばまして御目出度といふから子「へン藥鑵まハ序文附の駄洒落は今年から禁制だ 能「イヤ夫なら止るが新年の御祝向はへ子「有るとも〳〵

此年もまたぶら〳〵とくらすなり

盥つて歩行きん玉のはる

能「古ハ事を言てらア子「時に大人お年玉ハ如何 能「御催促で恐れ入るがすつかりと宅へ落し玉でチ「エ、仕方が無へヶ屠蘇を振舞て遣るがコウ其重詰を出しなせへ 能「ハテいつも變らぬ客遣ひの荒へ家だチ「御馳走に成り乍らふざけた事をぬかすぜ 能「ハイ〳〵是から成る處だチヤ提灯屋のぶら〳〵公御出なさい浮羅七と言ふ男「明ましてお目出度チ「ヲイ〳〵ぶら公大晦日の苦し紛れに昨夜ハ七つ屋と出掛けたナ 浮「ナニ飛だ事をチ「だつて已が今年の垢を流して戻りがれふ横町の曲り角でお前が大風呂敷を抱へて行くのを見つけたものヲ 能「ハ、ア夫あらコレ今日は曲ましてお目出度方だらうふチ「イヤ乙うものだ 浮「何の自分遠てそ今日ハ戸棚をあけましてお目出度方だらうチ「イヤ乙うハぐらかそぜマア一杯獻じやう 浮「待ちあヨれ着ハ何だ牛房にれ煮豆數の子豆腐で御座い 能「マア今日は何にも用ゑ無いヨ 浮「ハイ〳〵また願ひ升底でお屠蘇とお酒と両方お重絲でハイ毎度お酌を有難うイヤおあるのハリッチ「大層繁昌な酒屋だゾ 浮「モウおつもりと成て仕舞さぜお銚子は如何氣の利ぬ主人だぜ チ「ヘン氣が利て見チへ酒の價が懐中へ利く事神の如しだ 能「屠蘇袋でも左やべれカ 浮「鐵瓶で煎じるとい、子「イ

ヤ今奴等ア春早々いろ〳〵な事をいふツ折かゝ又も來る者は天明調の狂歌好き号を有
難井琴成と言ふ男へポ俳人の呑太郎と伴立て門口を覗き込み 琴「そも〳〵是は花の都
に有難井某と申す者にてゐ」呑太郎冠者居るかいやい 子「たつた三人居り升 浮「元日
かゝ戸籍しらべとはきびしいヲ 呑「いかねへせ〳〵大分つめかけて居らア 琴「ヤア御
這入んなせへ 子「ヨウ是ハ琴成大人サア〳〵此方へ呑公遅のつたナ 呑「ナニサ庇にハ
件が大有りだ今朝ハ珍らしく早く起きたので一番初日を拝まうと思つて淺草の富士を
さして出掛たとよろがイヤ驚いたの驚かないのト言つてコウ飛だものに出ツ喰したア
館「夫だから大晦日にも半金も入れて置兒ねへトヲ己がくれ〳〵も言たぢやア無へカ呑
「エ、掛取りの事では無いんざいソレ柳橋の的ヨ 子「ハヽア掛取りと客取りなら間違
つてもきつい事は無へ 呑「ヲット新妙にお聞下さい庇底で突然巳の胸ぐらをぐつと引捕
まへたと思ひなさいッ 浮「畏りましたッ 館「引捕まへさのでハ胸ぐらでむく〳〵そるの
が股ぐらで野郎はばん〳〵くらと來て居るから揃ひも揃つてお目出たい話だ 呑「イヽヲ手
前に言ふのぢやア無へ嘘で的の言ふにはモウれ前はん程餘りな人は無い去年彼はを約

束をしたのに顔も見せず定めし何處でかお樂みだらう今朝見つけさかゝは是非とも來
てお呉おはいモウ年始にも出す事いなりません今年中放さないヨウー 館「此べら作は
何だ寄せと言たら己の袖を捕まへて何うするのだ 琴「ハヽア洒落が高玄た物狂ひと言
ふのだヲ 子「痲病にかゝるといけねへから早く後を聞て仕舞はう 呑「サア夫から巳もと
う〳〵其藝妓の家へ引張りこまれて嬉しい様な大難儀をしたが元日から懇喧嘩も余り
だと思つてよく〳〵考へたら 子「一句出來たか 呑「イヤサ猫に引れたのも道理へン此
年ハ子の年で御座い升から 琴「道理こそ余りうまい話だと思つた 館「エ〳〵さし替り
まして申し上げ升 子「ヱ、最う女の話をする奴ハ三里外へ放逐だア 呑「ナニ敢居の外
で澤山だらう 琴「夫はい、が子之大人初買と云ふ御趣向は無しか子 子「其事〳〵時に
今年ハ寳船こゝ初買に宜いはつ夢を見るもかりぢやア面白く無いから銘々一趣向と言
ふも宜くある奴だが 館「妙々仲の町へ銀貨の雨でも降せるがい、 呑「いざ芳原といふ
時ハアヽ否お地口だ 浮「騒ぐな〳〵脚本條例を遵奉して一手〆と言ふ仕組が有ゼト思
案に餘念は無りけり 浮「コウ〳〵斯う言ふ事を考へ出したが何うだ先大名題を座敷雙

六と稱へて 子「サア大げさな事を言出したもんだ 能「往來で双六はしめへし座敷で双六が不思儀なものか 浮「ヘン今紀文の心を知ぬ奴ゝ話にならねへ 抑座敷雙六と言はまづ百疊敷の座敷で疊一疊を一宿とし中央を上りとし床の間を振り出しと極て乃ち座敷を雙六にするのだワ 子「夫じやア疊雙六だ 浮「夫のら張り子で大きな賽をこしらへ一つ振れば疊を一つ進く一番上りへ祝儀を出すのサ 子「己アヽア疊で見物とせう有「疊で上つたら疊ゝ上ゞ花はくれないのじやア無へか 浮「春の遊びにゝい、趣向だぜ 子「夫より哥留多のうゝへ一圓紙幣を張りつけて見子「氣違ひの樣になつて取ツくゝをするだらう 能「夫れより一圓只やつて御覽あさい却て悦ぶッ 浮「知れた事を言ふないゝ一圓どころか去年渡し場で二錢ひろつて歸りに鐵道馬車を驅つゝ時ア余ッ程能樂公も大悅喜に見えゝ 子「夫あ事ゝ何うでも宜が早く決着しねへと遲くなるぜ 呑「ヲットロ出來たゞ此方のゝ春早々極すごい趣向だ 子「ハテ十七人切りでも遣うといふ腹か 呑「舞臺は丞定まりの情死騷ぎと來て居ア 能「ウ、面白い〳〵早速道具を買て來ゃう刀と血紅だけ用意すればい、カ 呑「エ、夫な仰山にやるのじやア無へ後で想ひつかれやう

と言ふのざゝられしるし迄ゝざつと遣るのだ 浮「ヘエ已ゝ是迄色師交際も度〳〵するがまだ心中の眞似をまて思ひつかれようと言ふのは聞ねへ事だ 呑「底がまだ無學の至りといふものだ何時でも出なさい御傳授いたろう 有「心中學士とでもいふか 浮「死々死中の虫の方だホイ底で何うゝふ趣向だ子 呑「安く見るナ音羽屋といふ世界だせエへ、、、登樓てから少隨分騷いで琴成さんと已だけ一所の部屋へ行て飯を喰ふ段どりだ 子「後の運中ゝ何處に居る 呑「マア聞子へ夫からつと出し飯へふり掛けて喰を忽ち毒の廻つた思入れサア〳〵大變コリヤア毒を呑だのだト琴成さんに騷いで貰ふのだサア二階の伯母さんも振新も驚いて部屋を飛出して內證へ注進ふ行うと廊下をかけ出す其先へ幽魂があらはれると言ふのだ 子「左樣早く手廻しは出來めへ 呑「だから運中で已の幽魂になつて貰ひたい仕方が無へから安い御用ざが幽靈の代言人を勤やうエ、怨めしや〳〵ドロン 浮「ヘン幽靈の影武者とは呆れらア 子「コウ〳〵夫より一段立上つた事を思ひ出した 浮「ヘン足下の趣向なら立上る事は無へいつも潰れるから 子「イヤサ春の御祝儀ふ喧嘩といふ種だ 能「喧嘩が春の御祝儀

なら握りッ拳はおとし玉だらう馬鹿〳〵しい　浮「コレサ待たりシテ名題は助六かヲ子「先夫なものだ　琴「是は面白い　子「ソラ琴成さんも面白いと仰しやる　能「アイ左樣　子「能齒磨きの御用ハ座いませんかナ　浮「默止て居ろ　能「ヲヤ打したナ　琴「コレサ本讀中に喧嘩無用　子「ホイ其喧嘩で助六を思ひ出した　能「サア〳〵早く吐出したり　子「まづ斯うだ　浮「エ、脚色だけ話すがいゝ　子「分らねへ男だツ小說で言へば扱說との再說とか言て是が始発の謠ひ出しだワ　能「再び解ても三度解ても宜かう紛擾ぬ樣にさつし　浮「全体其前置がわるいテ　子「ハア夫ならばづと言ても惡いか　能「わるい〳〵　子「先まづと言てもわるいならまづ　浮「エ、甘く無いと見てまづ〳〵と言てヲア　子「サアおやんなさい拙者ハ引込み新造だ　琴「イヤ引込みが口を出ないと花魁が弱る　浮「チヨツ新妙ヲ聞て遣か　能「新造ヨ聞て遣れと云ばい、　浮「〳〵イ是から引込ヲ新造の子の公が再び本讀を致し升座で新造の重ね說ッ　能「イヤハヤ胸のむか〳〵する地口だ　子「サア〳〵本文に取り掛らう先斯うだ例の馴染の梅花樓の格子で素見て居ると思ひネへ處で浮羅公と呑公と能樂公と三人が地廻りでお定まりの喧嘩だ底で拙が三人を手ひどく打〆て登樓するといふ段取りだぜ夫から宜汐先を考へて琴成さんが一番親分と化て三人を連込み先刻ア能く己の子分を打たナ其返報をしに來た彼客ヲ逢して呉れと這入りこんで見ナ騷くに違へねへ　能「何だ夫ッ切か　子「夫かラ拙がもう〳〵と出て如何にも逢て遣うかラ此方へと座敷へ呼込むサア二階中は何うなるだらうと心配すると思ひの外で四人が座敷へ這入て顏を見るや否イヤ旦那と幇間氣取で例の大騷ぎは何うだ　呑「落も何ふも無へのか　子「春の事だから此位ふして置う　能「否だ〳〵此方四人ハ稻荷町ふ遣つて一人立者氣取といふ趣向ぢやア見物が大不承知だ　浮「其通り〳〵　琴「是アチト無理な點だ　子「イヤ會計は一人背負込みの大散財とするから遣て貰ひたい一生の頼みだ　呑「しめ〳〵奢りおらば遣う　能「我等ふ於ても此通り　浮「喧嘩廻り持なラ困るが一人持で妙〳〵ッ　琴「拙の趣向を一つお聞下さい　子「ソラ琴成をんの御趣向が有るとヨ　能「琴成さんの御趣向なら定めし天明調だらう　呑「天明町に茶番の道具を賣て居るとよろでも有るのか　浮「コレ天明町と言ふ町が何處にある　浮「ハテ形が無いのら聞

くんだナア 能「へン形が無くつて聞くものハ 浮「風と嵐と雨の音 能「幽霊のはなし聲に庇のひゝき 浮「やかましいわい 能「やかましいものは 浮「砂利場の車に溜車の音 能「炎天の水まきと雪の取り除れ方 浮「だまつて居ろと言ふのに 能「默つて居るものは 浮「鳴の看経と盤の坐禪と 能「運坐といへば 浮「エヽ騒々しい 能「コレサ今度ハ話しだ 子「呆れるア最う交つこ無しふ聞く事とせうぜ 能「琴成さんお話しあせへ 琴「拙のハ福引といふ趣向だ 子「ナル程 琴「まづ福引の糸をこしらへて夫を持込みサア福引ざと二階中に引せヤス銘々引て見ると糸の端に紙が結んで有るといふのだ子「ハテ子結ぶのかみとは有難い 能「紙を結んで數う引て福引なんぞは何でごんす 子「アヽ洒落も拙い上に古いと來て居ちやア申し分なしだ 能「夫なら福引やみな見めぐりの紙ならば 浮「ウップお目出さい男だ 琴「底で銘々讓で見ると梅だとか松だとか大黒だとか何だとか目出たいづくしが書てある 浮「ハヽア夫で福引といふのの 琴「ヤア何でもいゝとして夫から肝心の品物を長持へ入れてかつぎ込そやス開て見ると 子「分つた〳〵品物は大概知た〳〵 夫がいゝ〳〵 喧嘩だの幽霊だのといふ趣向より手輕くつで

いゝせ 浮「皆と何うだ 呑「夫にせう〳〵 琴「夫ぢやア品物に案じが有るといふわけで子「エヘン先最初御聞に入れまするは七福神見立の景物 浮「待〳〵〳〵連中が福人の形で行ちやア堂だ 呑「宜らう〳〵併し福人が二人足り無へテ 能「だから二人引ぬきました故福引で御座いとやるがいゝ 子「夫より不贊成で引館つて參りませんから「不服引だとやりなせへ 琴「大分揉るネ 呑「仕方が無へ品物だけにするがいゝせ 子「夫ぢやア品物は明日銘々持參とするが宜らう 能「持參承知 仕りました 浮「然らば主人 子「谷〳〵 浮「明日また拜顏致そで 坐らうイヤナニ琴成どのいづれ重ねて 呑「チヨン 能「れ眼にのゝうん 呑「チヨン〳〵〳〵 浮「ヤア大變〳〵香物鉢へ踏込だ 呑「醬油つぎも蹴飛されたワ 子「歸る處か掃除をして行ナ 能「ハテ口惜い事だナアチヨン

春の日ながら黄昏て夜店にならぶ蠟燭まで臘になりし町中を浮れ鴉のがや〳〵と廓へ急ぐ能樂吉ぶら七 浮「呑公は最行たか 能「何うして〳〵是から飲直しの上で景物を買て來る一件だから今夜は遲いせ 浮「折角銘々が仕組だ名趣向へ琴成めが半疊を打ち込んでおまけに子之助が圍扇をあげたもんだからとう〳〵余の趣向は立ち消えとハ恐れ

ニア　能「定免し琴成の今大愚が反り身で味噌をあげるだらう　浮「時に両人で福引の先ぶれを急ふ仰せ付られたれ宜が何ぞ廓中へ行て邪魔をする仕組れ無かしう　能「イヤ夫な事をすると後で大小言だ何にまろ此邊で一杯やつて繰込とせう　浮「お先そろへて繰込〳〵　カヲット此處が宜　能「ナイ〳〵馬肉はいやだ　浮「ナル程廓に馬てめやまる向の牛肉やがいゝと夫より互ふ圖部六とあり濟し千鳥足のちふ〳〵眼で大門〳〵ぐる両人が初音屋といふ茶屋へ轉げる樣に這入り込む　能「イヤれ目出度御座いッ　女「ヲヤ旦那れ珍ふしくお揃ひで花魁がお待兼で御座升　ウ　能「此方がお待兼だアヘン何もならねへアト二階へトン〳〵　能「時に浮羅公福引の糸は何した　浮「サア大事だ牛肉屋へ忘れて來た　能「何したふ宜ふう　浮「萬事此浮羅七に預けて置ヲへゲエイ　能「夫なふ拙者れ後運の來まで此處へごろりだト酔た紛れの頓着無しに茶屋の二階で白河夜船此光景を知るや知ずや子之助方には呑太と琴成爰を先途と首傾れて買集めたる景物に座敷れ市の如くなり　子「大分揃つたナ　飲「福祿壽と書て紙屑籠は何うぞ　琴「妙々拙は大黒といふので傘を出さう　子「鶴龜は何にしたら宜かろう　呑「鍋と水瓶でも有る先へ　子「何でもいゝから早く揃へて仕舞へう　琴「此處ふ松薪と吹竹のあるのは何でスナ　飲「松竹サ　子「まるで落し話しだハヽヽ　呑「ヲヤ此れ何だ七色唐辛子の袋に這入てらア　子「布袋といふのだから袋に辛紛だア　琴「ヲヤ〳〵勝手道具一式と來て余り品揃れが下卑るア子「處を今上等な品も交るつもりだ　飲「何うして此道具を持込むつもりだ　子「サア是には困つたテ　琴「車を言つけるとまやせう　呑「宜らう〳〵底で車で引て參つた事故福引でも御座いませうといへばいゝ〳〵　子「待ち玉へ〳〵此處にある大風呂敷へ包み大黒樣の袋と見せて持込みあんぞは面白いせ　飲「夫より釣臺で行て夷樣だから臺を釣て來たと言　子「サア〳〵また洒落出しちやア納りがつかふもせぬ事に苦勞し三人寄れば三分なくなす智惠を出す能樂人の癖として福引の景物を大風呂敷ふさふひ込み擔ぎ出したる呑太郎「ヤットコナ此奴ア重いぞ重いけりやコレ神田からも古いナチヤ子の公は何處へ行たト振り向く路次の出逢ひがしら「其處へ來さのゝ呑太ぢやア無いかいト怒鳴つけられ「南無三れ我の聲に相違無しだ桑原〳〵トお母さん何だ　母「何だつて彼だつて逃げ出すところを引捕まへろ呑太の母「待てヨ

手前今時分大きな包を背負て何處へ行のだ眞實に眼も鼻も離されやしねへ一寸湯に行たら是だものヲサア已が見つけたからて何處へでも行て見ろ呑「ナニサ此風呂敷が不審かヲット鉢卷の地口には遠い母「人を馬鹿にするサア何を持出したきり〳〵言へ呑「ナニサ勝手道具母「飛でも無い飲「ナニサ福引アレサ痛へと言ふ〳〵左樣胸ぐらアタヽ、景物だ〳〵其風呂敷母「飛でも無い飲「アレサ風呂敷を景物に包んだのだ母「風呂敷でも何でも持ち出す奴が有るものか飲「アヽ、子の公やアイ琴成さん〳〵母「何だお隣さんだとナニお隣の叔母さんを頼だつて聞ものかコレ家へ來いヨ飲「マア離しあせへと言た〳〵包が破れる、、ト泣出ーさうな貌をして居る處へ子の助と琴成は大盡氣取の大やつしふて來かゝり「飲公何うした飲「有り難へ〳〵「すあやまつてアタヽ、子「ヲヤ〳〵阿母ア何うしたのだ母「マアお前さん聞てお呉なさい問さへ有ると私の眼を抜てゝ家のものを持出して飲で仕舞升今夜も其傳を遣升ところをお前さん子「ハヽアれ捕へなそつたかイヤハヤ困つたもんだ呑「コレサれ前迄が琴「何にしろ拙が品物ぐるみ預る事にしませう母「イヤ〳〵れ前さん家へつれて行て油を取て遣に

やア懲ません子「夫も左樣だがマア今夜だけ預なせへ此方で油は取てあげる琴「飲公の油なら魚油よりき、が宜ふう飲「ヂイヱお止なさい升なト胸ぐらを引捕む飲太郎は逃やうとする機會ゟ包を取落せる景物ゟ瓦落〳〵〳〵母「イヱ〳〵今晩は何うしても子「マアイヽお止なさい升なト胸ぐらを引捕む飲太郎は逃やうとする機會ゟ包を取落せる景物ゟ瓦落〳〵〳〵此騒ぎに止人の両人は傘を踏破り釜へ尻餅をつくやら彼布團の景物の七色番椒を蹴ちらせば母「此奴ハックセウ〳〵飲太ゟ貌を眞赤にして「ヘックシセウ。ハックシセウ。ヘクセウと言乍逃て行呑「コレサ。ヘックシセウ琴「變でゲス。ヘックシセウ。ハックシセウ。ヘクセウと言乍逃て行東雲の納豆賣りを夜にして聞き眞晝の豆腐屋を寐覺の栞りと成す遊人の規則に外れぬ子之助呑太琴成の三笑人揚枝を喰へて非戸端へ陣取て作ゝ子「ハヽ天氣に成たせ琴「天氣を連子から見たらさゞ宜らうに子「已ア最う昨夜の唐辛子以來まだヒリ〳〵すらア惡い酒落だ琴「ナニ自分で蹴飛して置き乍ら惡い洒落も宜く出來た此方までれ相伴を喰せやアがつた琴「お相伴と言へば今朝ゟ飲さんのれ袋のところへ唐辛子見舞ひに行ざアなるめへテ飲「眞にヨお母にそう〳〵腹をたゝせて仕舞ふ一體此度の催しは已

一人嚢を背負たと言ふもんだ　子「嚢も背負たり包も背負たから悪かつた「ハイ御免なさい　子「誰だア　浮「己だア　子「浮羅公か何うしさ〳〵　浮「何うしたつて斯うしたつて昨夜は何の事だ已れ待通し持通しといふ目に逢たせ　子「イヤ夫に付ていろ〳〵ツト件ハすつかり飲公のお母かゝ聞た　飲「おふ〳〵ろハ何うだた〳〵　浮「何うしさと言てお前大変だ今逢たが是かゝ子之さんの家へ行てアノ野郎在ギウと言ふ目に逢せ升と言て居たから今來るせ〳〵　飲「ヤ大変だ〳〵子の公何處か隠れるとこハ有るめへか子「流しの下が宜ゝう　子「かち〳〵山ぢやア後生だと言ふから佛檀へ入れて遣う　飲「後生だ〳〵頼む〳〵　子「飲「戯談ぢやアねへ謝つて呉ねへ　浮「昨夜は唐辛子でビリ〳〵痛入たとでも言のか　呑「エヽ勝手ふしろ　子「勝手よりは座敷の方が隠れいゝせト口〳〵にからかつて居る折から路次の踏み板ドン〳〵破がれた聲で「御免なさい　子「ソラ來た南無お母大明神ツト狼狽て天窓隠して尻隠さずだ　呑「默止て〳〵　「御免なさい　子「チヤ苦い聲だせト戸を明れば能樂吉　子「ヒヤア能樂公　能「扨ハヤ厳しいお暑でケス時にのん太郎はお出でケスか

子「ヘイ居り升〳〵飲「コレサ〳〵能樂吉ハ大きな聲で偖昨夜ハれ待ほけを有難う少
虎で一寸意趣返しに飲公を苦しませて御覽に入れました是が先酒落仕舞で飲「有難へ
〳〵已アあとからお母が來るだらうと思つて大苦しをたヲット此奴が作者だつ〻能」
アハヽヽあやまり〳〵有り樣は昨夜の仕末を飲公のお母に聞たのだ子「首尾宜くやり
損ひのお祝ひに一杯やらう琴成ハ此時聲に應じて
當たらばヤンヤと言す福引も外れヽばよそお景物なれ

○戀の仲秋

上編　友垣を結ぶ　月の宿

若ハ同士は　月の出汐

郭公自由自在に聞里を酒店へ二里の御舉公有り兎角浮世ハ花に風事の足ぬが疎しけれ
ど風雅の道にハ足ぬのも又一ふしと理を付て乙に曲つた竹屋川岸向ふへ越て向島小梅
あざりに住居なす春窓といふ俳諧師金と暇とにさし合無ければさゝ月花の定座を樂み爲
業も無く暮すうち三日月の頃より待しと言ふ望の夜ふ成もがば今夜こそ月を肴ふ一連

坐を催ふさんと同じ流れの友達なる其月芳賀などゝ云る酒豬者を集ひ酒を片手に夜を
更も笑壺の圖居ぞ賑はしき其が中に桂子と言春窓の親類の若者「ゑう賀さん大分溜り
ましたせ　其「サア〳〵早く詠草を廻したり　春「芳賀和尙は猪口の二本持ばかりして居
て題紙はさつ〻り動かずだ　芳「ヘヽ八釜しい出來ない者に限つて溜めるのを否がるも
のだ　其「出來る者ふ限つてためるものか　春「宜噛合そる奴サ　ゑう「燕雀何ぞ宗匠の心
を知んサモシ其月と拙とは戀爭ひで探升のサ　其「ナル程三圍りの堤下で釣の競爭をし
たッケ春「幾錢のはまちふ成やした　芳「是は情ない色師を捕へて釣師とはハテ偖辛氣な
浮世トやナカ〳〵桂「ヒヤ〳〵それは無いクサ〳〵だ此歌は何れ句の上で取る可しサ　芳「其積で名吟を出しませうト詠草を讀む「エヽ格子
戶や月ふ氣のつく忘れもの「何だか分らぬ句だぞ　其「コレサ〳〵人の句を惡く言ない
で早くやつたヨ　芳「人の句を見て我句を直せざいヽ　其「アッア一得一失ッ芳賀子
も口はど筆が廻つたら鬼に鐵棒色師ふ金だ　芳「其サ色を商法にする芳賀なんぞは天窓
同樣ふ丸いもの、多い處から女より賊に眼を付られて此間も往來でセカ〳〵刀をぎま

付られました　春「ハテ夫から何うした　芳「仕方が無いかうまを謝つたのサ　其「何をいつて　芳「エヽン色師ばかりはお助け〳〵　春「ハヽヽヽ是だからうつかり話しも聞れねへと言ふ事ス　其「何の事だ　桂「もう上り升せ　春「時ふ近所でも有るし三圍りの其角堂を一評取うじやア無へカ　其「其事〳〵時に清書ハ　桂「後で遣りませう　其「恐れ入た　が願ひ度

唄「向ひ小山のあちら〳〵竹いたふし揃へてきりを細に十七が室の小口に書殊ーて花のさのりを夢に見て候

芳「ヲヤ離れ座敷でお琴が始まつたさうだれ妙さんのお琴も久方ぶりで覗ひヤス今度ハ御庵へ大分お長到留と見え升ヂ　春「イヤ彼も近頃何だかチト浮無へ様子なので保養かさ〳〵暫らく食客サー　其「ヤ彼様な食客なら誰も置たい子　芳「何の置き候が君ぢやア覚束無い話しだ　其「覚束ないと言へバ今夜はどうも思ふ様な句が出來ない　芳「甘い句は遣度のだが夫れが出來ないので句に病と云ふのサ　春「和尚斯う言ふ句もどうだ子「待つ宵や月かとつけの門歩行ッ　芳「久しいものサ一体懸の句にハ切れ字を忌みさうなものだテ　其「違へ無へ年礼の句は挨拶切れふして娼妓の句には廻しに爲ると言ふ春「ヲット碁の句なら二段切れ三段切れを咎めす　芳「サア〳〵大分火先が強く成たぞ余り廣がらぬうちれ暇と致さう　桂「ヤア宜では有りませんか　春「碁の句といへば一席夜戦を願ひ度　其「イヤ拙は歸宅して夜戦と仕ませう負ッ二無つてひゝヂハヽヽヽ其時又も小座敷で

唄「打寄る女波男波の絶間無くをか巻く水の面白やさゝず細布手にくる〳〵といざや歸らん已が住家へ

芳「ホイ彼唄でお間ふ合せだ　芳「左様ならば御馳走を頂き立の名句を詠み立の　其「よみ立や田を三圍りの　芳「エヽ洒落迄初心な事を言ゼトほう賀其月ハ歸り行く跡に桂次郎ハ重硯を片寄せなからヤヽ大變誰か白墨を踏みつぶして　春「俳席は此奴に困るヨろつくり掃き出すとしやせう時に桂さん今夜お泊りハ何うだヂ　桂「ハイ　春「併しお宅ハ　桂「ナニ此方あら宜しう御坐い升　春「夫なら左様する事サコレサ掃除ハ此方にさせて下をい男がすたるぜヘヽヽヽヤア小座敷へれ出なさい　桂「左様ならば彼方へ覗ひ升

うト庭下駄を穿て離れ座敷の障子を開れば春窓の妹お妙花ならば初櫻月ならバ十三夜と云吉原雀の文句の様お世間知ず今、琴の爪を仕舞つて居る所「ヲヤもうお客様はお歸りに成りましたの 桂「エ、今すみましたト言ひながら座敷へ上る 妙「貴君此方へお出なさいまし 桂「お琴は最うお仕舞ひなの 妙「忘れ切て居り升から止ましませうヨト琴爪をいぢつて居る檜舞臺いまだ踏ぬ粋の樂屋の若手揃ひ少焉二人默止の幕北際時計が

「カチ〳〵〳〵

中編　うつして見鹿

さそふ水ある　月のかゞみ　月の舟

桂次郎ハやう〳〵話志の種を案じ出し「近頃のお句をさつき拜見いたしません今晩などは書入れと言ふ景色でスかう定めし御趣向が 妙「何ういたしまして 桂「夫でも先刻何か書てお出でしたもの 妙「彼は何でも御座いません 桂「夫だつて確此處ふト硯箱の引出しから卷紙を出す 妙「御覽なさい升なと申すに夫はむだ書き 桂「其おむだ書が拜見いたしたいト無理に取て開けば可愛ふらしい手で

一人して見るをうらみや今日の月

桂「ハテ人情だ子兄さんの御仕込みだけ有て實に感吟いたし升卽し是ハ貴孃の愚痴をお詠なそつさもので定めし何處のかお方が居ておいでお一人でお月見をするといぬお怨みのお句か 妙「アレ夫ないやらしい事でゞ御座いません 桂「だつてソレ一人して 妙「存じませんヨト卷紙を取て破る 桂「ホイ私が頂戴して行うと思ふのに 妙「いろんな事を仰しやるものヂト顏をろむけて居る處へ春窓は烟草盆を下て「アヽい、月だ桂さん一席合戰でを仕やうか 桂「宜しう御座いませう 春「お妙碁盤と夫から茶菓子を早く妙「ハイト立て行く 桂「お妙さんは何々譯有りで此方へ御出で御座い升か子 春「些少ばかり有りヤス實ハ彼樣な器量でも年頃だけふ諸方の取ひき先から緣談の言込みが多く皆當人の氣に入ず私や弟の氣にも入らずサ夫と言ふのもチヤンと遣る家がうす〳〵極て有ると言ふものだから夫で緣談を避る爲先此處へ引取て置て近々其家へ遣うと思ふがまだ夫も當人同士ハ知ないのサ 桂「〳〵エ左樣でスカト話し最中へ妙は茶道具を持て來かゝりふいト聞たる此身の緣談當人同士は知ないが遣る家は極つて有るといふ兄

の談しにハッと斗り暫ふく思案ふ足を留たる後へ碁盤を手に下げて林といふ下女「ヲ
妙をよ何をまて居らつしやい升旦那さまハイ碁盤を 春「枝豆でも持て來な 林「ハイハ
イ 桂「一體今夜枝豆だの蛤だのを喰ふのは何ういふ譯でせう 春「左樣サ 十五夜
ふ月を見だから底で豆も蛤も喰ねといふのざらう 桂「飛だ川柳の大尾だハヽヽ
立ちいでてうしろ歩みや秋の夕」ト口吟みつゝ長命寺の邊りをぶら〳〵來るい 桂次郎
にて折しも後から追つくハやう 賀「ヲヽイ〳〵 桂子さん 桂「ヨウ 天窓の丸い 定丸郎が
出かと思つたらほう賀子昨夜ハ失禮 芳「ハヽヽ何も後姿がたゞの人でゞ無へと睨んだ
ので馳けつれたゝ貴君サ 桂「尻尾でも出て居たのヲ 芳「ヘン何うをならぬ時に今日は
何ぞお催ふしでも有りましたか 桂「ナニ昨夜から今まで流連で今歸宅と云ふ處サ 春「
ハテ夫なゝまだ時刻が早ゐエヽ一寸あとへ立返りの水神の夜景色を賞し乍ら一寸と
夕飯 桂「イヤまた近日として今日ハお別れだ 芳「でも御用さへ無くばハテマア御案內
ツ 桂「夫なら和尙の引導をうけるとせう 春「其事〳〵ト後へ引返して馳て水神の森な
る割烹店へ通入る 女「入らツしやい「此方へトト案內に二人は表二階へ通り酒肴など通

して後 芳「時に桂子さんは春窓さんと何うゐふ御縁故でスナ 桂「ナニサヅつと遠縁だ
が今じやア兄弟同樣につき合て居やス 芳「へエ遠縁で義を結ぶといふのかヲ 桂「交ち
やアいねチーマア從兄サ 芳「マア從兄が可笑しい時に變りやしたサア一杯姉さんお酌
をナヤ男のい、方へハ何うしても吹つける何うもならぬへア 女「ヲホヽ、貴君ハれ若
役にあと廻しとしたのでスヨウ 芳「お酌の間に一寸お大事なお耳を拜借だト女中に何
か談す 桂「ほう賀子お馴染でも呼のなら平にお預だ 芳「ナニ一寸した事サマア〳〵一
杯 桂「をう此通だから充分〳〵 ほう「今日はお過しなせへ拙者が附てある 桂「浮雲ハ
附人だア 芳「何うして〳〵勤るとよろハ急度勤ると云ふ酒で御坐い升からヲ 桂「敵媚
迷惑だ 芳「イヤ是い恐縮〳〵ト笑ひ興じて汲かはすうち秋のあらひの忽ちふハラ〳〵
雨の降來れば 芳「是ハ妙〳〵 桂「ナニ妙だものかサア困つた和尙早く出かけ玉へ 桂「
夫なら左樣しませうト是より夕飯を仕舞て立出る頃は日ハ暮たり 桂「雨は晴かゝ
つたが眞闇だ 女「お車が參つて居升 桂「ほう賀子言つけたのかほう「デゲスト乘移れ
ばガラ〳〵〳〵桂次郎ハ飮ぬ酒を過せしくるしさに吾妻橋を渡るまでゝ覺えされど後

は白河夜舟ふあゝぬ夜の車の母衣の中腮て「入つしやいト言ふ聲に驚いて車を下りれば是仲の町の引手茶屋なりー

宵頂天の

三々九度の

月の都

月の盃

どゞ逸「主がかぢつと親爺の腮を嫁と言れてさせりたい」藝妓「チャ〳〵乙なのが出ました子へ芳「お前の心意氣だ藝「ヲヤ宜嬉しい其通りでスだけれど先がいれません芳」車止免の札でも出て居るのの藝「ヲヤ宜事を言て居らつしやるヨ仝「旦那一寸お聲古を芳「能樂會の平伏拳と言ふのを行う藝「夫なのは知ません芳「エ、面倒なソラヨイ〳〵アサ飲玉へ藝「くやしいチへ「どうも旦那には恐れ芳「入り谷でも有るめへ煎たての豆か仝「兎角下主ばる男だ芳「下主張ると言へば狸公は何だ箸を持て間誤ついて居るせ狸「ナニサ蠟燭を明るくしてエ、扨十八番ヲ演じ升サア彈たり〳〵ト座敷は陽氣な引手茶屋芳賀がちよす紙花あらで春の景色の色里に名も小松屋と夕まぐれ桂次郎は酔た振で隣り敷座ふうた、寢の獨り言「ハテ人を言ふ者は分らぬもの昨日逸風流一圖と思つゝ芳賀子も今夜の仕末にハ窮いた此な事なゝ向島で一杯やゝねばならぬ宜つたものヲッイ飲もせぬ酒で夢中に成たのでとう〳〵此處へ連られたのも一向知なかつたのは此方の不覺と言もの、今更逃るにハ逃られず何うしさものと思案最中芳賀はよろ〳〵來かゝり「イヨウ見付たアヽ風邪をひき玉ふなサア〳〵寢たけりやア今直に宜い初夢を三つ布團と云ふ景色を見せらアヽ兎よ角拙に任せ玉へ桂「今是う酔て居るから後陣にして君てお先へ芳「夫なら行ますせサア〳〵出陣〳〵と騒ぎちらして出て行しは剛染の樓へ行ならん後に桂次郎は矢立を取出し何やゝ紙へ書付て二階を下りれば女は口〳〵に御案内をソレお濟ぞんお履物ッ桂「イヤ待て下を以此先の茶屋で金を取て來るわけが有から一寸行て來ヤス女「ヲヤ左樣でスか夫なら行て居らつしやいまセ桂「時に是を芳賀さんへ屆けてくんな女「ハイ夫なれ早くトいふ聲をあとにして大門を出ると等〳〵人力車で家へ歸りしとも知ぬ芳賀は妓樓にて待ども〳〵桂次郎の見ぬ故迎ひを遣ると驅て茶屋より「旦那へお屆け物お連樣は御用達に芳「イヤ是と盤ト紙を開れば「小松屋へ君ゆひかれて來れども外へ子の日の罪は作らじ」イヨウ、

、、是ぢやうだハテナ

「何時迄も有ると思ふな親と金」此二つを怖れ過て鈔漿遍ハ本所に有ると思ひ編笠茶屋のあとと寺町だト獨りすまして途徹も無い不通用の人も辟易なれど亂離の人より忠臣の犬「色里が明るく成ば家ば闇」の規則を守る連中も參る件には參り兼ね粋と通との本街道ハ片寄ぬに高點有りとハ皆知ての上の迷ひなれば鬚麥は延ぬうち汁粉ハさめぬうち遊蕩は迷ハぬうちの思案に依ば是專賣の粹ならん野暮な親玉金升の句に

見れば別て關をもとりぬ花の山

桂次郎ハ月花の樂しきまゝ物言ふ花よハ心を止ず急ぎ家へ歸りしより今日しも書齋ふ机と首引きのところへ「眞平御免下さい偖其うちハト庭から這入る芳賀を見るより桂「ヲヽ是はれ珍らしい時に先夜は何うも折角めあ催ふしを滅茶〳〵にいたして濟ぬのでエヽ御わびに出やうト存ぢて居る處ト當りさはりの無ハ言葉ふ芳賀は耻入り「サア其おわび旁拙の汚名をすゝぎに參上いたたやした先彼事は拔に願ひたい桂「拔にでも丼にでもそるがシテ汚名をそゝぐとは芳「ヘエ其事サヲ今朝あたり御尊父から何

ぞお噺しが有ましたか桂「イヤ何にも噺しは無いが昨日春窓さんが來て大分親父と長噺しで有りやした芳「夫なら今にお噺しが有りやせう「イヤ其噺しは已がするト一間を出る主人の桂藏芳「是ぢ大旦那桂「お爺さんお噺しとは何で御坐い升桂「かいつまんで言ば斯だ手前を外かゝ養子に欲ハと言ふ件ヨ夫れは外でも無い广金屋の森吉だア其に行ぬ事判然返事をしさが宜い芳「實は春窓さんの御頼みで不意と詰らぬ心から吉原といふ鍵を掛て見たところイヤ桂子さんの風流には驚きましと御承知が有ばアノお妹御ぢ御本家のれ隱し子だとやらで別家をさして家をたて度と春窓公の御はからひ貴君が一本戚吟だから早く御返事を桂「別に遑存ハ有りません仰通りト聞て芳賀「其媒人は此芳賀桂「何ふしても和尚の遊蕩を諷とハ知なんだト笑ふうしろへ「其軍師も此處に居るト其座へ居ならぶ春窓其月五に喜ぶ兩家の吉事さうふ水有る緣談に立し日數も十五日其十五夜の物語り盡せし戀の仲秋も後は蕾ずとめでたし〳〵

○人情見立三景

第一　花の暮に寄る藥妓の戀

花の雲鐘は上野か淺艸哉降ぬ髷りをしく空にゆとりを含む水際の蔦も黒みを斜陽や鐘に櫻の里ならで人も散行く隅田堤仇し心の竹屋から狂ふとにくへる駒形あさり引きも切らざる屋根舟の多くて戻る横間を上流へ進む二挺櫓の中には粋客里鳥藥妓米吉御定なりの粋間幸次と豆八モシ「鳥大入何程夜櫻の渉催しでも人は歸る鳥は寐る其中を豆ヘン何とて松はつれなかるらんカチ幸「コ、館く人の話しを消す男さモシ米さん大分御機ざふきぎ豆「何見て潑る幸「其サ潑るも轉るも未だ冷つく川風にあたつてゐ氣が惡いチト何處へか吹き付ては鳥「何うだゝうと言ふ相談か是非今夜は向ふへ上るのぢやア無へのう米吉「ハイ鳥「またハイが始つたぜ米「ヲホヽヽ其では何と申したら宜んでショウ鳥「ナニサ浮ねへかゝヨヲ幸「諸事浮く奴ス浮て居て惡いのゝ盃洗のチヤ猪口といやア貴公が皆分捕の両手に桃色櫻色で獨り呑靜はさびしいぜ道理ころ寒い豆「ヘン猪口を取れて寒いなら德利を持たら蒸殺されるだらうヤア〳〵幸「何うした豆「大事の〳〵御主樣より大事な手拭へ酒を飲せたのヨ米さんの御酌が惡い米「ヲヤお

となしい者を捕めへて大概だ幸「アヽア堪を思ふと不便な件だ抽者なぞゝ手拭も褌も豆「兼帯に使用ふとゝふのの幸「飛んだ事をいふ其樣もの迄も仕送ると云ふのだナニ抽者でも無へソラ小つるふお細に豆「お松にお竹にお梅に米「ヲホヽヽ幸「さんれ林をんへいつゝけるヨ幸「大丈夫何と言ても來年ゝ氷入ぜの新世帶と出掛やスヲホン樂しい中じや無いかいナッ豆「サアゝ代は見ての御戻りゝゝ是は隅田川の船中にて生捕まましたるイヤ此な口上よりゝヨウ足下の猪口を貸たゝゝ幸「エヽつくなゝゝ古風な乞食だ豆「自分の酒落にゝ氣が付ねへでホイ御燗長右衛門と云のを御願み船頭鈴「ヲイ鳥「コウ其なら久し振で植半にしやう豆「堀切以來御坐へ升鳥「彼家の蚊には驚くヨ寐ても寐られず幸「鳴く蚊に心ひかされてカ豆「ナット出來なゝゝサア鳥大人鳥「モウ飲ねへ豆「何の彼のと宣ふ果ゝ米ぎんの御酌なら一杯となるんでケシヨウ鳥「ヘン先づ出來ねへ望みだヲ米「其なに當付ずとサアゝ豆八ぎんも一つ豆「ナット有馬山かソラ又大變ヤアゝゝ幸「何だゝゝ今度ゝ其方で手拭か豆「其な事處の彼處を見さり幸「何かゝゝ豆「ソラ土左だらう幸「大違へ彼ゝ提灯だア豆「左樣かいめへました

米「豆八さんの鑑定ゝ何時も其なもんだヨヲホ、、、幸「此近眼が珍らしく何か見付たと思つさら違へ無しッハ、、、豆「コレ近眼でも出雲の帳面へ乗て居る男だヨ憚り乍ら幸「出雲より七ッ屋の帳面へゝ定不斷御乘りなさるエ〜ン豆「だまれ〳〵米「洒落ずと豆さん御箱の木證しでもれやり豆「其木は御免を蒙りの新工夫を聞せやうコウお前と雖しなに湯を何杯と云ふのだ幸「此奴は又可笑しい其なふお前ゝ寐しなに湯を何杯豆「私しは寢しなふ湯を五杯米「ヲホ、、其湯ゝ豆「鷄卵湯幸「其湯ゝ豆「薑湯幸「其湯に成て仕舞た豆「ナニ洗湯も同し湯だからい、米「い、ッたつて寢しなに洗湯が飲るものカ子鳥「ハ、、、ト笑ひさゞ矣く折舟は植半の棧橋へギイ鳥「ホイ何時の間にか到着だ

名にしれゝいざ言問の團子屋で有や無しやと探る懷中鳥「〜ン團子の狂歌だけに甘く丸めた積だらうが趣向有て言葉足ずとでも言さうだ米「其扇は豆八さんのでスワ鳥「ウヽ彼奴が書ど付なのだナ時に豆八と言へば幸次も何處へか行たやうだ米「今下座

敬に居ますヨ鳥「呼で來給へ米「何故へ私ばかりぢやァいけません給へ鳥「ナアニ此な者いお前の相手にいなら無へかゝヨヲア、痛又いぢめるぜ何うしたんざ米「何うしたんぢやァ有りません此間かゝ郵便だの使ひだので呼びふあげても音沙汰無しやう〳〵今日御眼にかゝつて此な首尾は無いと思へば又否味ばつかり御言なさい升子宜いヨ其積で鳥「コレサ何も音沙汰無しと云ふのでゝ無へ米「知りません鳥「チヨッ勝手にし給へ米「其なら何うしたら宜いんデス鳥「何うする斯うすると云ふ紋切り形だ最う和睦〳〵米「ア、子私が惡いんだのら鳥「惡いも宜もあるものかヲヤ大分人聲がするぜ夜客の有るのは此植半が一だのうコウ何故隅の方へ逃るのだ寒氣でをするのの米「寒氣處ぢやァ有りません皆がお前はんふ熱くなつて居ると云ふんでスワ鳥「フム證據人が居無へとツて其樣ふ口かゝ出任せをいふと殴ぐて置くぜ米「其は此方から御頼み申す方で有り升ヨウ鳥「また始めるのゝト飲み置きの酒をグーと一息に飲む米「最うおよしナお前はんの酒は雪と同樣だから鳥「何故米「當て御覽謎だヨ其心ゝ何時も後が思いものヲ鳥「違へねへれ前に敬はつてサ米「オイれ酒なんざは何でも無いヲ私こそお

前へんに敷へつて若勞する者が有るの　鳥「何だ　米「何でもいゝのオホ、、、、。里鳥は寢轉んで「オイ其處にある枕を取つてくれナイ、子だから　米「おつうお冷かしだねへ小兒のやうに　鳥「れしつけ出來るかゝ今のうち馨古をして置くのだア　米「宜しくサ氣安めも大概にれえなへい　鳥「チヨッ左樣聞れちやア根も葉も無へ奴　米「アレ寢ると聞ないヨ里鳥へん〳〵アレ「モシ鳥大人〳〵　鳥「エ、大きな聲だ豆公と幸次い何をして居さのだ　幸「モシ妙の又妙といふ御話ありサ外でも御座へません此豆八が　豆「ナニ已が何したと　幸「いろに成て下さんせでえ無へオホン鳥大人を御存じの今後から這入てんだ女てれつを彼筋ふかけてへ眼の早い豆八が歌次さんだと思つて暫くを極たから可笑しい　鳥「彼へ山の手サ　幸「左樣サ庇で先の返事が挺擬だつさのでやう〳〵氣がついて匆々浴室へ駈け込と中には表座敷の客が居たので右も左もてれ込だらけサチ　豆「コレサ〳〵其は幸次の出鱈目モシ鳥君全く跡形も無し　鳥「ハ、、、隨分無へ事も有るめへ　豆「オヤ〳〵大分敵が殖たぞチへ米の字米の君へ拙者の心の狂ぬのへ宜く御存じサ米「女とお金を退てはのへ　豆「チヨッ又内返られちやア續く味方が無へ最う戰爭い種

切れッ爲「此方は酒と討死だア、酔た〳〵醉覺ふ鷹の爪の澁味ならさしづ免言問でゲスゼ米「ア、チお頼みだから幸「オットそれ呑込八百人ドレ日のくれぬうち些少も早くオヽ左様だト立かゝれば豆八も後のう「曲者まてイヨ成田屋アト追て行く米「オヤ豆さんも行たワ爲「差向ひはあやまるだろう鳥「何でスとへ米「何でもいゝワナ米「オヤ八を茶におきだねへ爲「其だから團子を買ひにやつさのだア米「憎らしい鳥「コレサ又いぢ免るのか米「いぢめ殺しますヨ鳥「お前ふ殺をれりやア本望だ米「フン殺す處かうつかり赤い痕でを付けて御覽なはい何處に怨む人が有り升ワ鳥「怨む人よと迷ハせる人が有ア米「ヲヤ聞きたいチへ鳥「此壁に聞て見な米「ア、チ川の方へ向て居る人だといひ升だろうオヤ寢るとき、ません鳥「強氣よ眠くおつて米「其處ハ冷たいから床の間の方へお出なゝいナといふのに爲さん〳〵鳥「あんな闇い處へ行れるもんかエ、宜く邪摩をする妓だぜ〳〵とう〳〵自分も冷たい樣側へ出て來た癖ふト笑ひつ泣つ戀ゐをかひの果ハ其處とも白川夜船鴉の通ひ路其ならぬ話しも忽ち中絕るしが米吉ハろつと立て側の茶を飲ながら「オ、あついトゐふ後邊で下女が「モシ〳〵湯がよろし

う御坐い升此場所演劇ならチヨン

第二　雪の曉に寄る娼妓の戀

日頃惡む鴉も雪のあーた哉誰が眞實の一つ夜着とゐひれん廓のさぬ〳〵ふ着る羽織のうしろかゝべロリと出した舌も見ず叩く手元の五臟迄染み渡らする空實意を能くも悟らで傾城に實無しとハ誰がいふた野暮な口からいき過さあど、口順みつ、歸るもわれば振れて戻るやけ腹に「ろくな貌ハありやせんト惡口だらけを言ふ粹士ハり行ふと首ひ否だといふ書生仲間の大評定の中へ割込む新造と娼妓「モシ中山さんきつい愛想づかーでスチへ此雪ふ氣强く歸らずといらんワだうせ此雪では歸れるもんぢやアない流連まて驅ぐ可し乙「イヤ君は宜ろうが僕がいかんのだ甲「何故いかん乙「チヨと耳貸せコレ娼妓達は退た〳〵ナソラ何うぢやト咽くハ外でも無き金の一件あらんかト甲「ウ、左樣して又來よう乙「サア〳〵歸る可し女「オヤ何うしてもお歸りなさるんでスカ頼もしく無いチへ中山さんアレサ甲「晩に來る女「まさ此間のやうに其つきりいいやでスヨ甲「大丈夫金のサアペルサ乙「

〳〵ン新ト〳〵は洒落だハ、、、、女「オホ、、其なら晩にはきつとでスヨ階子の音トント
ン〳〵〳〵若者「へ、、、、旦那大分御早く御帰りで御坐へまそ子　甲「また來るのぢや
コリヤ寒いワ　女「ソラ御覽なはい　乙「宜ワ中山殘ろうか　甲「今度は君が其お事をいふ
ら　乙「コリヤつもつたワ〳〵
未練は止めて行け〳〵　若者「へ、、左樣ならば〳〵と下りては卽ち離さ玄とひか
「淺からぬなかに中の間奥二階梯子のさつなみばた〳〵ふる袂振り切る髮の亂れ〳〵て山吹の花いろ衣主や誰ぞへと答もくちおしの耳無し山
の言の葉もむづかしさうにもふしでの神掛てとれ有りふれた脊中た、けば閨の戸をト
唄ふは何處か白妙の雪の一間に娼妓花里嘘いつわりを賣る丈に實を盡す客も多さは浮
川竹の慣習なる其筋らしきてう次郎と云男浦團の上に撫牛といふ通り句「夜が明たら
强敵に寒い　花「だから今斯ういふものをこしらへるので有升ワ子　てう「ウ、妙々きぬ
〳〵や雪かこつれの迎ひ酒ツマア火鉢の際へ出張しやうアツアツあつヲ、あつい花「
鐵瓶のへ其だから此方はおよしョてう「ナニ口を向ふへ遣ば最早吹れッぉれ無へ吹れ
ると言ば此雪ぢやア堤迄行く間に深草の少將となりさうだ晝に成たら道が付くだらう

か花「だれも道を付やアしなせんヨ毎日來るのぢや無し些少れ氣休めでもお聞せおは
いナ　鳥「あべこべに昨夜澤山窺ひましたから今朝の寒いのと同然で手も足も出ません
花「また惡まれ口だヨ　鳥「ハィ〳〵　花「戲談ぢやア無いの今日また歸りがけに何處か
へおろげ込うといふんでせう子　鳥「雪の道でころげ込なざア宜ぜ　花「たんと氣を揉せ
てお置き　鳥「氣を揉せたくつても種れ無へ　花「種はあるサ　鳥「イエ未だ川岸かゝ歸り
ません　花「ぶち升ヨト　鳥「氣の早い姑だのヲヤ白妙をんカ子其時廊下で「チヤ鳥をん
なたりましたヨト障子をあける　鳥「あたる筈サお前此頃は新さんの歩行ぶりゟ似て來
こぜ　白「ヲホ、、何ぞ取りまはう　鳥「れてるよりれ何時のお惚氣をチト減じて貰ふ方
が功德になりヤス　白「ヲ、怖いしつぺい返しだ事　花「マアお這入りナ　白「御免ないゝ
ましヲヤ此紙は何だらうト拾てあければ
「歸す氣になりや又降る雪に未練を寒氣が持て來る
白「ネ忝じけだヨウ　花「今朝は御樂みらしいゝ子　白「初の客を歸してせい〳〵したばか
りサお樂の節れ有りまへんヨ　鳥「其あとざから有るのサ　白「花町さんぢやア有るまい

し鳥「フム其ハ花魁も同じ節だのう御羨ましう存じ升　花「また野暮が始つたヨお前ハんの様でも無い　鳥「いふ丈野暮でも獣止ちやア居ふれ無へのう白妙さん　白「ハイ〳〵此間も花町さんが左様ゐ言ひなはいましたッサ　鳥「へエ其から定公し情郎の噂ばかり子野暮迄に窺はう　白「ア、はなしまたた共〳〵いつを鳥さんの噂で聞く私迄此頃は逆上性になつたのでスヨ　鳥「何の事だお前迄が氣休の請寛か　花「白妙さん相手にゐなりで無い鳥さんに揉れると人が悪くならアチ　鳥「チト古いがお前ふ教はつたのを口うつしだ　花「其なゝ私ア新しい積で言う人中で引を取無いやうに仕込だの　鳥「ハイ其は有難過て何共申されませんシテ御禮は幾何程さし上ませう　花「心持ちでいゝから置て行きな　鳥「へイ〳〵　白「お守でも戴くやうだ子へチヤ誰か來た　鳥「サア當ッて早くや　花「私ア お糸さん　鳥「清公だ〳〵其時障子の外で「イヤ大當り〳〵ト笑ひ乍ら這入るは茶屋の息子清七「花魁〳〵イ旦那此間は　鳥「何うだ素敵に積つたぢやア無へか　清「左様サト言ひ乍ら花里へ指を出して「此雪を看ふいたしなをいずつと關の戸で御坐い升せ　白「小町がいゝ絲へ　鳥「少將ハ此處に居ふア　花「何だとへ　鳥「もうよし〳〵二度

言なくつても此寒さには直風邪ひきだア、惜しい事に假名違ひだ　鳥「ホイ引くと言へばもう此方へ陣を引く事だ　花「ソラ又始まつたヨ　清「モシ只今の關の戸ぢやア無へが通す事はならん〳〵モウ一杯獻じませう花「先刻もいふ通り道がつきませんかふ御流しなはいヨ　鳥「雪の道へつか無へでもふ廊下を喧嘩でもしたらしい禿の大聲「覺えてお出ヨウ早く歸ふにやア家へ言譯の道がつか無へヤナ　花「其なら今夜ハ急度　鳥「承知々々折かう花「先刻もいふ通り道がつきませんかふ御流しなはいヨ　鳥「雪の道へつか無へでもふ廊下を喧嘩でもしたらしい禿の大聲「覺えてお出ヨウ

第三　月の宵に寄る　娘の戀

名月や疊の上に松の影　普子が吟ふ白紙あたり此處は何れの寮にや有りけん舟板塀に見越の松粹と野暮とを取まぜて庭へ綾瀬の汐水を間近に呼し池のうち其浮鷗か松島の景色もさぞと思ひやふる、離れ座敷の此方には今宵一夜を泊りがけなる男一人に女中が二三人琴三味線の合せもの月琴笛の合奏に氣の凱臥てさま〳〵の浮世ばなしに時をうつす中にも口輕で生娘ゐ好る、質の愛敬者淺次郎「何うした事だか今日へ女島へ一人飛入りでさん〳〵いぢ免ふれのおまけみれ能弄戯を拜聴するなぞは大嫌だ、腰元

お光「ヲヤマア若旦那をまが彼樣事ばつかり貴君こそ先刻饒妓が何したの何だのとお嬢さまのれ氣のもめるお話をなさいましてのらに 淺「ヽエお妙さんの氣のも免るとはお光「ヲホヽヽ何でも宜しう御坐い升 全お竹「お光ハ燒餅やで御坐い升のらお揶揄あそばせなヲお嬢さまは 淺「彼處の欄端ふお出だれ妙をん〳〵何か面白い事をし升から入つしやい。娘れ妙「ハイ一寸此處へ入しつてご覽なさいまし 淺「ドレ〳〵ト欄側へ出て行く 妙「アノお星さまの樣な灯は何で御坐いますのう 淺「彼ハ釣舟の灯サ何日中ハ富士の電氣燈が彼位に見えましたらうヲ 妙「エヽ釣と申せばアノ翌日は釣を致しませう 淺「れ妙をんのお釣は定めし大きなものがかゝりませう 妙「イヽエ何う致しまして小さな鮒ばつかり 淺「夫でも此間池で鯉と鮒が話して居ましたお孃さんの針なら餌が無つてもかゝり度ト 妙「アヽレ又彼な 淺「ドレ遲くならぬうちお暇として 妙「ヲヤお歸り遊ばすの光やお歸り遊ばすつて 光「余りで御坐い升ヲへ若旦那さま 竹「何なに淋しくなるか知ませんヲ 淺「夫でも宅へ沙汰なしだから 光「先刻車夫さんふ左樣いつて歸しましたヨ 竹「夫だからお歸りに成てもれ宅へもうれゞりで御坐いませう 淺「何の事だ夫ぢヤア何うしても御厄介かヲ 妙「其お積で入つしやり乍ら人ヲ 淺「實は此景色にすつかり迷つて仕舞たけれど家へ斷り無しだから歸り支度と出掛たが 竹「貴君がお迷ひになるとはよく〳〵で御坐い升ヲ 淺「また〳〵いぢめるヨ 竹「迷つていたゞき度ト此處の景色が申して居り升とサ 淺「只さへ迷ひ度ヲて困つてるものヲ最う〳〵夫に悪いぢめは止にして何ぞお妙さんのお好な事を 妙「何を致ーませう貴君お笛を最お聞せなさいましナ 淺「是ハ飛だ事だ夫より今夜はれ三味線が余り出ませんヲ 妙「さつきり致しませんヲ 淺「貴孃なゞはお稽古が澤山だのら毎日取りのなくてもなか〳〵大變でス併し何れも商賣人で入つしやるが 妙「アヲ否な 淺「眞にヲへれ光さん 光「左樣サ併し若旦那さまふは恐れてれ出で御坐い升ヲ 淺「何うもならない敵は大勢 竹「お味方なら千人力だ西洋がるさでも始ま

せうカヲ 妙「彼は靜過て面白くお坐いませんヲ 淺「花合せといふものハ下婢たものでスが今でハ貴社會で流行升妙が好で御坐い升ヨ 淺「有たつけヲヘ 竹「ハイ御坐い升ヨト袋戸棚から出してくる 淺「ヲヤ是だものヲ油斷

のあらない何時れ覺えなさいました 妙「イ、エ妾しい存ぜません が光や竹はよく知て居り升 光「お嬢さまは若旦那さまに激へてお いたゞき遊ばせうして致ーませう 淺「宜らう〳〵併し此方のハ横濱花と違つて上方花の極野暮な仕樣だヨ 光「私のも左樣で坐ゐ升 淺「夫ぢやア數を勘定する方だ子 竹「ハイ裏菅原と青短冊い渉坐い升の 光「裏菅原ハ塲破しで青は役破しで渉坐い升 淺「三ばん空素さらしなどの手役有りで三光四光や何かの役は皆取るのだらう 光「ハイ 淺「宜し〳〵夫ぢやア負ッこ無しだ 妙「妾は拜見して居やうヲ 光「若旦那に見てお いたゞき遊ばせ 淺「私が軍師になつて二人を負し升 竹「左樣は參りません 光「ハイ碁石 淺「ヲア一枚お取り 妙「何れでも宜う渉坐い升のチャ滕の花 光「梅の十もの 竹「ヲヤ上桐だハイ出升ヨ 妙「妾は一番仕舞で渉坐いを廣げて渉覽チット三ばんざ 妙「同じものが三枚 光「チャ〳〵ハイさし上げ升 妙「始から取るのチへ 淺「ヲヤ〳〵向ふでは妙な取りかたをしたれ妙をん此札をお取り 光「チャ最初のゟ裏菅原のれ望みだチャ〳〵大變なものを起えた 竹「有難いチへ是で青ハ割れた 妙「何を出したら宜の 淺「櫻サ 光「セア呆

れ升始から松と櫻の短冊を 淺「アハ、、ト遣て騙かしゃ迄の事サ 光「お竹さん氣をつけヨ 竹「何だか氣が揉升チへマア否だ猪だの鹿だのばつかり來るヲ 妙「是を出しませう 淺「夫ハ仕舞まで持てれ出おさい 妙「何ざか三四枚ばかり取たッ限でいゝものが取ませんワチへ 淺「夫で充分の勝でス 光「宜う御坐います今お負し申し升 淺「エなら お妙さん手を見せてお遣ソラ松の短冊が塲に有て櫻が起てれまけに仕舞で梅の短冊を御持參 竹「アラマア 光「夫ぢやア知きつてゐるお負だハイ十六づゝさー上げ升 淺「サア勝ました 竹「お惡ゝしい子へ今度ハ若旦那さまは御助言なしでれ孃さまばのりで致ーませう 妙「否だヨ 光「いゝれ師匠さまがついてお幸福で御坐い升ト背を叩のれてお妙ハ「アレト言たばかり淺次郎ハ庭を眺め「此月では寐られない 妙「今夜ハ何時迄も起て居りませう 淺「もう十一時か子 光「イゝエまだ左樣ハ成ません 妙「何ぞ持てれ出十 光「實に先刻程のお口取と葡萄酒を持て參りませう 淺「今やう〳〵醒ました 妙「夫なに飲りもしないでアノウ早く 光「ハイ〳〵 竹「ドレお手傳ひト笑ひ乍ら庭下駄を穿て馳て行く後に淺次郎は柱に寄りか、り「彼方の屋根のところへ見える森を御存じか

妙「何れで御坐い升　あさ「此處へ來て御覽　妙「ハイ彼れ八百松で御坐いませう　あさ「今年の春大勢で行たつけ　た「彼時は面白う御坐いましたネ　あさ「彼時より今夜が一番面白う御坐い升　た「嘘バつかり夫でも歸るなぞと仰つてから　あさ「夫れたゞ家を思つて一寸申したのデモ貴孃ハ歸ると申した時お嬉しさうな顏をしてお出だつた　た「マア彼樣事を夫は泊らうと仰た時　あさ「私ハ何故左樣れでもチホ、ヽ、ヽト言度事て腹で言ふ其初戀のわりあしや折から月見戻りと見て垣越しに聞もる鼻唄

「物言で泣ぬねたるを笑ふてか眞にこゝろも闇の夜のよがるゝわたしが身のつらさ

淺「まだ寢ぬ人を空に知るかな　光「ハイれ誂へが參りましたヲホ、、、、ヽ

○軒の五月雨

花の都の花に名だかき隅田の堤より綾瀨橋の方へ下り往こと一里ばかりにして堀切村と云るあり花菖蒲の名所ふて五月上旬より六月下浣までは白に絞りに紺淺黃大輪小りん種々に咲出し花のゆかりの色を詠めんと粹も不粹も雅も俗も出かれて賑ハふ武藏屋の庭池の彼方の小山に設れし田の面眺望す亭の宅にハ中橋邊にて家号を長柄屋と呼ぶ呉服店の息子梭香之助が番頭角七小僧正吉はのに未社清藏と云ふ者をつれ並べ立た る酒肴に何れも半醉の興に入り　清「なんと關兵衛よい景色でハないか　角「左樣でござり升此菖蒲の花を肴にいたしヱヱ惡い語路だ　正「イヨ成駒屋ア　角「魚雜りに雜ぜッけへすな　清「オット見付たゾモシ若旦那アヽ彼處に咲た水際のたちし物いふ菖蒲ハいかヽ香「ハヽア成程美しい子　清「角さん彼は知てゐる筈だ　角「僕ハ風流一しき女共などには關係の氣が無から知ぬ哩　清「其義は目じりの下臘梅でも譯ッて居るがアノさう去年開化樓で寄あひの時　角「ウムウさう〳〵　正「ソチラ目尻だゾ　香「ハヽ、、、角七遣られたなオイ　清公盃に縮がわく〳〵せ　清「釣堀でも始めませう　角「若旦那改めて差上ますヨアヽア正公酌なと云たら　香「今日ハ隨分やらかしたのヲ瓢箪だけハ既に平定かヲ　清「何と云たつて正的と來たら八岐の蛇帽子をぬげ猩々ハお次へ下ッて平伏しろと云やうに飮のだ物を　正「ア、嘘々こつちは小田原町の雨風で肴あらさと云のだア　角「天麩羅やすし屋あらしだらう　清「開化樓の花は思ひきつて最早此陣をひき歸るの頰冠りと爲

ては如何　香「ナニ〳〵植半で夕飯にするのだから未だ早い　角「彼處の夕げしきと云たら眼前で實に好せ　清「然けれども居着て住身になると飽るさうだ何事もまア其樣ものか　正「夫でも清さんは朝に晩に居つゐて見て居なが〻内室を可愛がるぢやアねへか　香「アハ、、、是リヤア正的の疑團が至極と思われるのらずかヲ　正「イヤア大變々々　角「エ、悧りすらア何樣した燒ッこける酒を飜したのか正「れ周章をさるな。エ若旦那アレ彼の八ッ橋の向ふにれ在のは岩城屋の内室とお孃さんの樣でござい升ぜ　清「夫がなぜ大變なのだ　正「歸りに御一所で植半日の暮がたになる川風が颯と來て明りを吹消すソヲラ何樣だ　清「ニヤル程岩城屋のお桂さんは豫て若旦那に然て見ると正的の云ふとほり（一段大きな聲を揚）大變々々　角「何の事だ喋々しい其處でお供ハハ、アれ闘ぢん一人か　清「イヤれ作さんも居るのら角さんハ御滿足だらうソヲラ向ふの亭の蔭から　角「ドレ〳〵　正「アハ、、ア番頭さんが首を伸した處は泥龍が年頭に來たやうだ　角「何をか食て口を塞いで居ろ騷々しくつてならねへ　清「何にしても若旦那我々へ對しても植半ぐらゐぢやア濟せ悪うござゐませう　香「何ダ奢るやうな譯が有るのか　角「とハ世を忍ぶ仮の名で實は大有り初物の御賞翫　正「コレ番頭さん何なと食て口を塞でれ在なをハ皆々「アハ、、、、折から此亭の前へ來かゝりし一群は本町の岩城屋と云る糸問屋の妻れ磯ふて香之助の伯母なり娘お桂と侍女のお關下婢のお作をひき連池のまハりを歩行ながら蔦浦の花を詠め　磯「モウちつと來に成とのう　關「夫だが彼處の亭の前のは今が盛りで御座い升　桂「ドレほんにヲヤ彼處にイみ少し顔を赧くして「香さんがれ在遊すヨ　作「アレまア嬉しいれ供は番頭の角七をんと元氣の宜小僧どんだヨ　關　オホ、、中橋の若旦那さまだからお孃さまが一ばん先へお目付遊ばしと言ひ掛けれ磯の顔を見て口を押へるお桂ハ「アレと言てお作の顔を見た斗り目元を仄り赤くする　磯「オヤ〳〵まア夫でハ歸りが賑やかに成て飛だ好かつた此時香之助ハ揚りハなへ出「オヤ母伯さん能こんお遠い所へお出なさゐました　磯「お寺參りから廻ぼて來たのサお前は未だお歸りでは無の　香「モウ出支度をして居たところ然がまア一服　磯「イ、エ遲くなると仕ないから〻直に往ヨ　香「夫でハ私もお供しませうト角七を見かへり「帳合をよしか　清「公瓢箪を忘れちやア往ねへヨサア伯母さん參

りませう 磯「宜かつたのうれ桂やお前ハ歸り道で日が暮さゝ何樣せうと案ぢてれ在だッたが香さんと一所に成たので賑やかだかゝト何心なく言れもて娘心に耻のしく「ハィと答へも口の内こぼるゝ斗りの愛嬌を瀧藏は橫目で見ながゝ香之助の脊中を徐と平手で○ポン「エヘヾ

○日ハはや西に入相の鐘ケ淵なる東岸に閑けき水神の森を砌りの一攅植半樓の奥二階ハ不二も筑波も一目なる長江萬里の水の面を傳ひて涼しく吹入る、風ふ燈を消されしと障子立きる彼方には嗜まぬ酒を强られてお桂は醉たる苦しさに獨樣さきの欄へ身をよせ今日はどうした吉日で募ふ男にゆくりなく出あふも緣の橋場かと思へば心朧げふ見やる石濱今戸の里紙うつ砧の音をよそふ賑ふ酒の席にて取る猪口よりも戀ごろも重疊も欲しく思ふあるべし香之助も堀切にて過せし酒の醒やらぬに又此處へ來て幾杯をか傾けたる故前の醉まで引出して座に耐りかね川風に吹れんとて徐と樣頰へいで「アヽ醉たゝと獨言欄に腰を掛んとして「オヤ誰だト遶し見ッお桂さんじやァ無かゝ何時の間ふ此處へお出だ今日はさぞお草臥だつたらう 桂「イヽエあの皆さんゝ連て來

て戴いとので草臥も忘れ偶然に來ましゝワ 香「何故よんな所にお在のだ然してお腹がお空だらう 桂「お酒をツイ二ツ三ツ戴ましたので大層に醉オホヽヽせつなくッて徃ませんかゝ徐と此處で醒して居ませノ 香「道理で少し赤くふなりだ夫でハト懷中を探り紫金丸を出して「是をれ飮直に宜くなるから 桂「ハイ 難有

はうが大事なので御坐いますよウ 香「何と嬉しがらせをお言でも此様な書そこなひは返して戴くのト引あふうち下へ投る振をして懐中へちよいと露そお桂は抛れたかと惘り下を覗く折から植半の女ハ障子を明て「オヤまア湯ッ暗い軒洋燈が川風でいつの間にか消ましたアノモシ御膳を召仰がりまし 香「オット宜風呂いやうだ子 女「ハイ是も最れ召なすつて宜う御座い升 香「今喰に往から飯櫃ばかり残して置ちやア往給へと言て下さい 女「オホ、、、と立て行 香「ネ桂さん御膳を食て夫から湯をお浴あ 桂「ヨウ扇を返して下ぎいつッたら 香「彼れ楽てしまつたからト自分のを取出し「是にれしよウ 桂「否々いやでござい升と涙ぐむ 香「此方がいくら好か知やアしないが 桂「い、エ笑ひながら扇を出せば 桂「アヽレまア楽た風をしてお意地わるなト横を向て徐と目を拭く 香「サア御機嫌を直してお呉よう其様にこの扇が大事かねへ 桂「ハイ 香「なるとに幸福もんな扇だ併し此様なことを為ると海をんに叱られる 桂「オヽ否な 香「何故いや桂「アヽレ左様ぢやア有ませんヨウ貴郎が海さんと何か情でも有やうに被仰るかうサ

可怪しな 香「然も左様ようしいものを 桂「アヽヲ八ツ 香「また腹を立れると往ないから往う然が此櫻色の愛敬を海をんふ見せさらホイ夫を よヲ悪らしい 香「アレあゝ悪らしがるのだものヲ何と思つたッて断念るより外仕方がないお桂は香之助の顔を見て怨めしさうに差うつふき 桂「悪らしいのは貴郎が海をんを被仰からの事真正ふ悪ようしい位なら貴郎に書て戴いた扇を寐るふも祝元へ置やうにして大事に致しませんアノヲ他が貴郎のネ書れるより幾らか嬉しう御座いますのふト否味を言れてまことをいふい心小をき娘のく せ恥かしををも忘れ草秋野の薄穂に現れさそう水あらば往ん風情のありながら口へは出し得ず恩ひにのみ夫れと知すゐ丹令に香之助も染じを好くなと「そんな嬉しからせて可愛とをれ言だと真正にはるが好かゝト背中さすればれ桂ハ袂を噛へてさし俯き小きな聲で「アノ真正にして下さればト言たぎり赤らむ顔を袖に隠し胸をドキ〳〵さするなるべし時に庭先の棧橋へ船のつく音ギイ、女の聲「お客様だヨチウ 壁の耳障子の目をも忍び罪のその濡縁は聲板の音には〳〵と鳴出したる時

計の針に各家路へ引のへし季候ハナヨンといつ秋の月の景ときに廻り無さい波の音にて蕗あけば此處もやつぱり隅田川上手へ上る屋根船の櫓を押す手元ものろ〳〵と牛の御前を右ふして左ふ見やる待乳山の民の竈も賑はしく立る今戸の瓦煙富士を背にれひ行むまた眠に筑波山あを〳〵と水も靉を敷しに等しく昨日に増して風情ある景色いこの四邊に止めをさす杯手前きいめに其方をおがめて興に入りたる香之助彼の末社の清藏に向ひ「堀切から植半へ往たのも昨日今日と思ふうち最餘ほどに成たのう　遊「あの時武さし屋で物言ふ菖蒲の花だなんのと言たのが世ふ申す前表で植半の酔ざまし能あるる手だが紫金丸か何かでとう〳〵目元を赤くする別品無類の花菖蒲の苔の氷あげ蓮花では無が開いた開いたへン戀路へかけると我々よりも長八しくないはいゝが夫から彼花菖蒲さまは何事もお手に着ず殆ど空ッぱうの風船で度もなく昇り詰るから果い破裂して表むきと成に極ッて居るのサ番頭角七このときも供にて　角「待たまへその件につ　香「此ひだ伯母さんが來て奥の座敷でこた付て　一大事オット違ひの大吉事ありサ　香「此居ごのは何だつた　角「うのと袷は古いから若旦那の思召しにズボンと羽り礼首尾万マ

ンテル夫を御存じ無と言のは電氣燈元暗しとは清さん新鮮の穿ちだらう　香「酒落は次号で早く語たり　角「近日のうちにト言かけ（一際）聲を張あげて高砂やアといふのサ清「大きな聲だ乃虫が怖へ〳〵ア　角「怖る處かの煩ひと來たので植半の一件が判然ゐらはれ事忽ちに落着まづは御安心お目出度ございオッホン　香「何だか氣味の悪い身振りだせ夫のらお桂さんを左衛門尉ふ爲るとの極りか子　清「實に〳〵然し若旦那ハ木曾の深山で木が多いちう件だから機械をもつて製した氷で當座は立派に塊まつても直に解るので困るンだて　香「ナァニ　角「ウヽ灘しの内ふ彼の嬉しさうなお顔ッ　清「イヨ若旦那まづ大團圓何も彼も如此いけ〳〵いさくさはねへ御夫婦なのをへお睦じければお店も益〳〵大繁昌やう時に船の音ドチン「イヨ大當りめッ

○春景梅柳

梅が主なら柳がわたし中の好のを妬むのの或夜ひそかに窓の月心ないゑへ仇あらしと唄ふ聲さへ三味線の音さへ懐しき東嶺の山の下谷に名にしあふ花の夕邊や月の宵雲の

肌の歌妓が軒を並連し數寄や町二間の間口一間の土間へ陳列し塗下駄や草も下たる提灯に若緑屋と字太に書入口の上には於柳〻吉小露と記せし名札を掲げ傍の窓の格子の内には二ツか三ツの鉢植にも花數多きを縁起にして祝ふこゝろか春蘭の葉さへ戰々伸伏て客を招くに然も似たり表にボコ〳〵塗下駄の音して格子の外から「〻ちやん家かへ〻「ア、居るよト障子を開て「鶴ちやん洗湯かへマアれ這入りナ　鶴「有がたうト内を覗ひ「オヤ姉さん今日ハ　柳「鶴ちやん早いねへアノお前の所の姉さんも今日は船だとねへれ客ハ誰だへ　鶴「宮彦さんとか云ふ氣障ァな人ですワ　柳「ホ、、、夫でハお前の好な松さん彼好男子は何樣しさへ　鶴「オヤ否なねへホンニ夫を云やァ姉さんアノ雪さんとか被仰れ方をお見掛申したワ　柳「オヤ〳〵何時何處で　鶴「只今不忍の長酡亭でさト聞てゐた柳ハ煙管突たて膝を進免「れ一人だッたの　鶴「イヽえれ梅さんに小蝶さんに小春さんとサ　柳「エと言たきりで溜息つく〻「マア姉さん雪さんも餘りぢやア無かに他の處なら未しもれ梅さんを連て長酡亭あたりで遊んでハト言ば小露も又側から「アノ夫で知たワ此間小蝶さんに遇さち何だかッツン〳〵して否ふ惡て口をきいてサ私は何

の譯だらうと考へが着なんだッけ〳〵「オヤ姉さん何處へ」柳「ちよいと其處まで〳〵」ヱ長酡亭へお出ので有ませうが夫では姉さん悪いからァア何も彼もアレサ吾儕が宜いやうに爲ますよう」柳「なァにお止でもない雪さんの水性も程が有けれどお梅さんもお梅さんだ他の男を横取した其上に面當らしい事をされちやァ吾儕の顏が汚るから默然てゐ居られない離して遣てれ呉よヲ」小「イヽヱ夫でゐ悪いんでス〳〵「ァアサ姉さん短氣なとをしないで吾儕の言とを聞てれ呉ようァヽレまァ「ヱヽお止で無と言たらト振もぎつて格子瓦落ヒシャ駈出す向へ來かヽまたりし俳人鳥影「ヤお柳さんヱ是は何樣だ駒下駄も穿ず清姫の人形身とゐ何事ヤアア待たり一体何の譯があつて」柳「鳥さん何卒後生だから止ずに遣てお呉あはい〳〵「モシ鳥シ鳥さん早く姉さんを止てアレ放しちやァ往ませんよヲ」鳥「ハッテ何の紛議か知ラ袴へが短氣ゐ損氣ヤアく〳〵内へコレサ一寸這入ねへと言のに折から上野の四時の鐘ボヲン〳〵

○春景氣空も長閑な紙鳶うなりの聲さへ何處となく誘ふ陽氣に連られて心浮れつ汲む酒の醉がまわればなか〳〵に誰不忍の池を見わらら長酡亭の座敷ゐ雪次郎と呼ぶ聲

客が藝妓のれ梅と其か、へ小蝶小春ノ二人に酌を取せッ、取留もない飯事話しに笑ひ興じて餘念なきゐ外目に夫と羨まし雪「アヽ何だと忙然と成て仕舞た梅「其筈だヨお前はんは夕ゐアお柳さんの所へお出のだもの ヲ腰が跟々蹌々してサお大陽さまの色は何樣に見えます悪らしい雪「オット悪推は廻しッこなし自己の落膽したのゐ逢たいと思つさ人と向ひ合でお酒が飲る樣に成たのでがックリ氣抓がーてしまつたのだ梅「そりやァ吾儕のとさ口の滅なゐ此上嬉しがらせ迷いせて殺せ積りノ眞正に刃物持ない人殺しとゐお前はんの事だヨ雪「ひどく言せコウ〳〵酒はもう澤山だ春「何ヲ面白いとをしてれ遊びなはいな蝶「小春をんてへば此間玉川で取魚ゐ何だッけとお聞だから妾が鮎と言たら宜いれ返辭で洒座ゐますつヽてサ八が悪いヨ雪「アハヽヽ此奴アいヽ春「雪さんは先刻のら時計ばのり見てお出なさるヨ梅「その笛今夜ゐれ柳さんの所へ子へ然からサ悪らしい雪「又悪のか里ふ往て居さ子は誰でも此樣されるのサ蝶「アヽレあの口だ物を姉をん吾儕が僧を取て上升ト立掛り襟の上からら力任せに抑付る雪「飛だ羅生門だ是サ首が抓さら何樣する春「扱たら箱入にして仕舞て置のオホヽヽ雪「

信濃者の力で押て堪る者か信禮た〳〵　春「夫ぢやァ今夜ハ急度姉さん所へ〻泊んなさい升か　雪「手強い宿引だぞ其よなら何樣せうかまをせん　梅「雪さん眞正ふお泊んないよヲ夫ともお柳さんの方が好ノ向瀨お柳さんと云て筒井筒とやらで深いお馴染だのらねへ　雪「能否味を言せ惚さに後も先も入た事か若緣屋は撮み捨で初音屋の方にすつかりお御興を居て仕舞たのだ　蝶「アヽラ嫉ばッかり雪さんハ川普請の土手で杭ちらかすのが上手だと　春「アノウれ柳さんの腕輪ふハ雪さんの書た物が這入ッて居るとサ　蝶「左樣して此間は比翼紋の指環が出來揚つさとねへ雪「左樣双べ立ふれちやァ勘工場も協ハねへ　梅「宜かふ澤山茶ふしてお在なはれ雪「お好とならばだがッンと目尻を上られるので何だか不氣味に成奴リ　蝶「アヽラ又彼樣な　梅「ソヽいう水性の仕樣ハオホヽヽ、手強するからサア雪さんモウ往なほうぢやアないか　雪「ヱヽマア暮切てからに仕樣　梅「氣のない返事だねへマア誰が恐れんだらう宜かふ衣出ないよヲ　雪「夫ぢやァ小蝶さんと小春さんハ先へ往給へ　蝶春「アイ姉さんは是かふ何處へ　梅「家へだが雪さんと後から直に　蝶春「夫でハ雪さんお先へト言ず

て二人ハ歸り往　雪「ドラ夫では此方も徐々出かけると仕樣か

○暮かゝる空に朧の夕煙向が岡の燈火みえて岸邊に眠る靑柳の下を男女の二人づれ「雪さんモウ暮たねへ春の日ハ長いと言が今日は大うう短かのつたヲ　雪「夫ぢやァ大さに助つたらう　梅「フお前はんぢやァ有まいしお柳さんの所へ往うと思つて時計斗り見て居る癖に日が長いので嘸お困りで御坐いましたろう　雪「ヲヽ推察の通り他の家では四邊へ兼るから早く初音屋へ引上たかつなのだが先や然程には思やせぬのにッ三下りの文句と調子で居る奴サ　梅「お氣の毒だが毎晩逢たら嬉しかろの方だヨウ　雪「アヽ痛へ三味線の轉手ぢやァ有めへし捻られて堪る物か　梅「オホヽヽ好氣味だ　雪「夫ぢあァ此方でも池の中へソレ　梅「アヽレ怖ハ　雪「アハヽヽヽ仰山な聲を出すせ折のら向より聒くるお柳夜目にも夫と見て取て突然お梅の胸元つかみ「お梅さんお前はんハ顏に似合無性惡の義理知ずだねへ雪さんと吾儕とハ互ひふ好た數寄屋町ふかい契りの仲町と此居まいりのお酒樓でハ誰しふない者ハなふ其戀中の邪魔をして人目を盜む横戀慕よく男を寢とつた子其上ふまた所も有うに名も不忍の近處も搆ず是見よがしに往來お

かでの千話苦説斯まで顔に泥を塗られ何ぼ空氣な吾儕でも默止て引込ぢやア居られないサア清然と黒白を此處で付てお呉ト水際の蘆の角目だてば此方も酒に醉たる勢ひ必ずたちまち荒立て「オヤお柳さん何樣したんだエ能弄戯か恨をかれ前こそ往來中で男を取たも能出來た夫程大事な雪さんなら鎖でも附て置なら宜へン何もお前が雪さんの家族何人の中へ遣入て居る譯ぢやア無サ夫だからお氣の毒乍ら雪さんは妾がお貰ひ申ましたサア雪さんお往なさい此樣なとに攀て居る間は無から柳「エ、虫の宜い雪さんへ妾が連て往んだト取る手をれ梅が突のけて「邪魔お爲で無と言ながら二人の間へ割いる機會發裡墮ふちる鐙甲の櫛へ二ツに折て飛ぶお梅へいよ〳〵急込で「ヤう堪忍がと武者振つけば柳も「何のと取付て引掻やら叩くやら轉びッ起ッ泥まぶれ雪次郎はた〳〵有漏〳〵ひき放さんと喘逼ても互ひに意氣地の力瘤摑み合ふ手を弛めれば持餘した其ところへ息せき駈來る鳥影〳〵吉この体を見て惘りし鳥「ヤア大變折かく取押へたと思ふ油だんを拔出して此騒動と何事だ〳〵ア〳〵待た放したと寄てさかつて二人を左右へやつとの事でまづ引合けの懇相撲道具廻れば此處はうも數寄屋町なるお柳が家若

繰屋の二階のてゐ雪「イヤ鳥影君何とも汗顔いつもおがらの大失策で飛だお世話に成ましたと天窓を掻ば鳥「アハ、、此樣な失策なら誰もやりて〳〵併好男子すさるのも又困る所無さにしもあらず然が先騒動は治りけりかし雪「夫につき此盤では置兼へかう中直りのシャン〳〵を遣てへのだが松源ぢやア何樣だらう鳥「イヤ其事ならお蔭屋が宜ぢやア有やせんか瓦庵ふ眠りやず雪「ハッテ何故ヲ鳥「然バサ手打なら蕎麥屋

滑稽笑説　乗合船大尾

〔乘合船〕

明治廿一年十二月十五日印刷
仝　年仝月十八日出版

定價金十五錢

版權所有

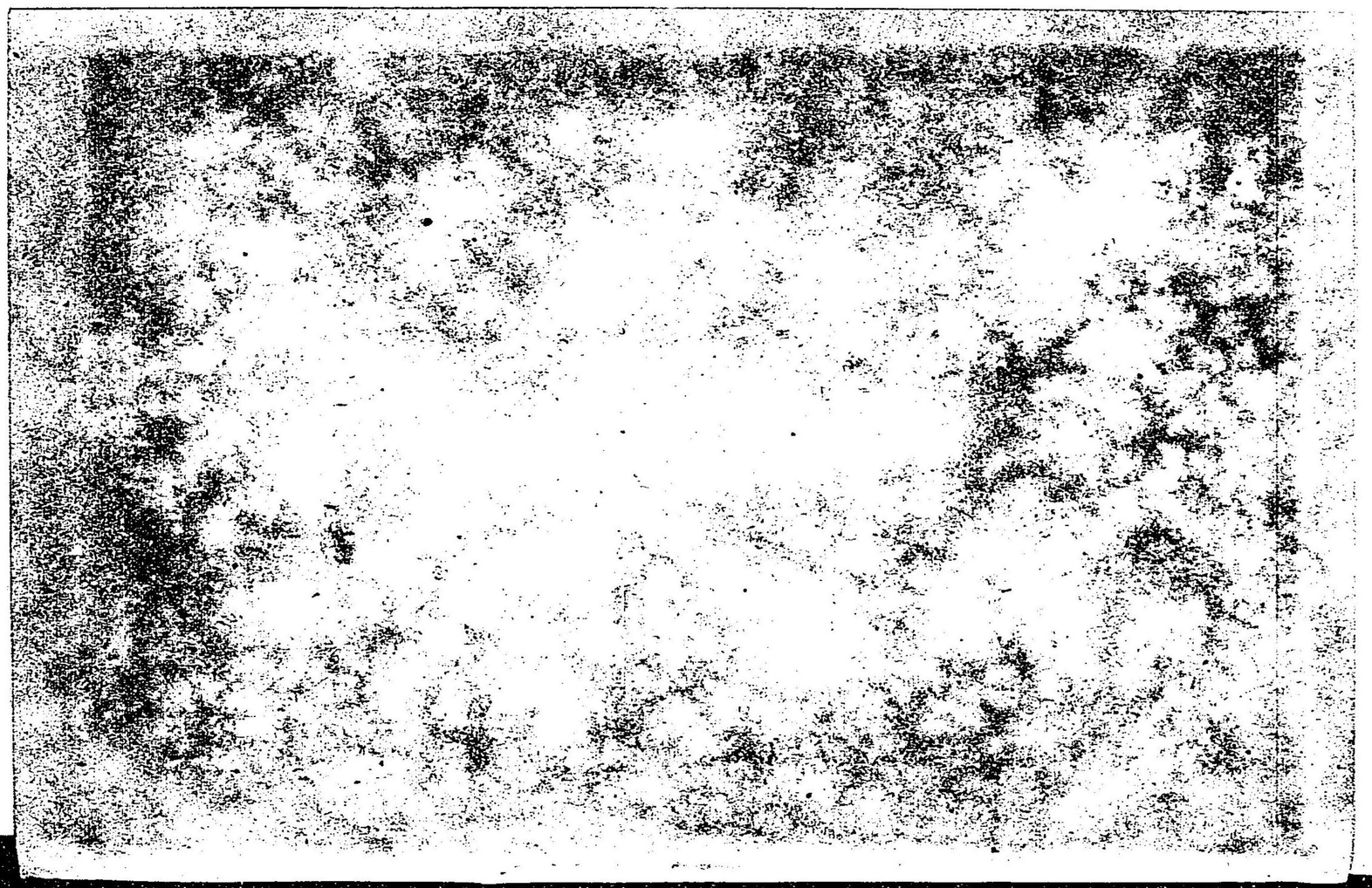
著作兼發行者　東京府士族　長井總太郎
北豐島郡根岸金杉村四十五番地

印刷者　東京府平民　永井鏡之丞
小石川區掃除町卅三番地寄留

發兌　漫遊會
小石川區指ヶ谷町七十三番地

發賣所　日本橋區橘町四丁目　鶴聲社
日本橋區通四丁目　金櫻堂

版權所有



特10
390

091837-000-8

特10-390

乘合船

鴬亭 金升／著

M21

DBO-0355